
俺の彼女は委員長です。

蒼雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女は委員長です。

【Nコード】

N9050S

【作者名】

蒼雷

【あらすじ】

何の変哲も無い高校生の水村光輔。彼はとあることをきっかけに委員長の早乙女璃桜と付き合うこととなる。付き合うと言っても、そのきっかけとなった言葉は「私の奴隷になれ」であって……。委員長とその奴隷であって彼氏でもある高校生による、学園系ドラマタラプロメ。

第一話 二人きりの状況は耐え難い

【第一話 二人きりの状況は耐え難い】

一年六組の委員長、早乙女璃桜。

その名を知らぬ者は一年六組の中ではいなくなってしまった。もしいたとすれば、それは耳が節穴になっている奴だ、耳鼻科でも行って来れば良い。

入学式から次の日のホームルームで委員長に自ら立候補したのだから。しかも、見た目も凄い上玉。

これはそれから二週間と数日経ったある日のことである。

俺たちの高校は入学してからゴールデンウィークを挟んだら直ぐに運動会があるのだが、俺はその実行委員だったのだが、その時事件は起こった。

踊る大×査線みたいな言い回しなのは気にしないで頂きたい。

「実行委員、委員長各一名、教室で待機……か、学級旗と八チマキの確認って」

今日は友達とゲーセンでも行って音ゲーをやろうと約束していたのに、女子の実行委員に残って貰おうとお願いしに行こうとしたところ、陸上部に入れば即戦力になれるような速さで逃げていった。

そつ言う訳で俺は教室で待機している訳。

「水村君、確認しに来る先生ってまだ来てないの？」
「そうみたいです、委員長」

俺に話しかけてきたのが委員長。高校生とは思えないほど大人びていて、声からスタイルまで、色んなものが普通の高校生とは違う。正直二週間の間で星の数ほどの男子に告白されたいらしいが、その男子達は美しく散っていったらしい。

実際のことを言うと俺も好みのタイプなんだけど。

「ちょっとトイレでも行って来ますかな」

「ええ、良いわよ」

俺はその時気付かなかった。偶然と偶然が重なって最悪の状態であつたことを。

二つの偶然が重なっていた。一つ、俺の足がスポーツバッグの肩紐に引っかかっていたこと。二つ、後ろから委員長が歩いてきていたこと。

まぜるな危険と書かれた薬品を混ぜてしまったかのような状況になつていたのである。

立ち上がった俺はそのままトイレに行こうとするのだが、スポーツバッグの肩紐が足に引っかかって転けることとなった。

そのまま転ければ何でも無かったのだが、委員長がいたことによつて悪夢が到来。避けようとした委員長は避けきれずに俺と一緒に転けちゃった、と言うこと。

「きゃっ！」

「おっあっ！」

沈黙だけに支配された、音も無かった教室に二人の声が響いたと思うと、壁に吸い込まれたかのように静かになってしまった。

その後なんて言うまでもなく分かり切った展開になってしまうけど、第三者から見ると俺が委員長を押し倒したようになっていんだよね。

……どうするよ、コレ？ 何と言う死亡フラグなんだろう、ギャルゲーじゃないんだから。

俺が初めてプレイしたギャルゲーなんて、こんな最もらしい展開だったような気がするんだが、それを俺が経験するなんて思いもしなかった。

「……あつ、委員長、これは偶然なんだよ！？」

「いや、分かっているんだけどね……」

委員長は俺から目を逸らしている。無理もないな、こんな気まずいことになったんだから。

……いや、でも待てよ、先生が来るまで俺は此処にいる委員長と一緒に先生を待つことになるんだ。何と気まずいことだ。ワ×ピースのゾ×とサ×ジが二人にいるときよりも気まずい。

この場を切り抜けるのは火星からダーツをやって点をゲットすること並の難しさに値する、どうにかせねば俺の命が危ないかもしれない。

「あの、外でも出て来ます」
「……………」

委員長は受験戦争に敗北した受験生よろしく茫然と立ち尽くしていた。……マズイ、この場から緊急回避せねば。第六感が予感しているぞ。

そうなった俺はその場から猛ダッシュ。左に扉が見えてきたところで直角に左へとターン、車ではねられた時の勢いばりの転がりを経験しながら外へと出た。

「ひとまず、俺の命は助かったな」

何故か命が狙われていると仮定して話を進めているのだが、某高校生の妹がそんなに可愛いわけがないよりもそんな訳は無いのだ。ギャルゲーとかの展開って憧れるんだけど、実際に自分に降り掛かってしまえば後悔の念だけが残る。

「さて、先生来ないかなあ……………」

幸せそうに手を繋いでいるカップルを窓から俺はぼんやりと見ていた。

*

先生が来てから直ぐに確認が終了し俺は夕焼けで茜色に染まった教室を直ぐに後にしようと思った。

俺が作った空気とは言ってもラドンよりも重々しい嫌と言っほどの空気なんだ、さっさと解放されねえかなあ。

「ちょっと待ちなさい、水村光輔」

「……はい」

ドスが僅かに聞いた声が俺を呼んでいた。

「今日のあの事件、忘れる訳無いわよね？」

「いやいや、忘れる奴の方がいないと思うのですが。そんな奴は脳がツルツルなんじゃないのか。」

「責任……取って貰うからね？」

「どつすれば良いんですか……？」

友達からの借金が返せなくて困っている中学生みたいな顔をして

俺は委員長を見た。

委員長は俺よりも背が低いのに俺を見下ろすかのように俺を見ている。その目は高校生かと思えば裏では神様だと恐れられている高飛車な女子高生のようだった。

「私の……奴隷になりなさい、そして私に尽くして」

綺麗な薔薇には刺があるって言う諺があるだろう？

それと一緒にだ。可愛い委員長には裏がある。

第二話 授業中に携帯は使つな

【第二話 授業中に携帯は使つな】

現在、俺の中ではまあ普通の教科の一つである理科基礎の授業中。最初の方はね、まあまあ分かるんだけど、後から吃驚するくらい凄く難しくなるんだよね。

ノートを取る気にもなれなかったので先生にバレないように携帯をイジろつかなどでも考えているとポケットの中で小刻みに来る振動。

本文をおそるおそる確認。

『今日、お弁当作ってきたんだけど食べない？』

何と委員長からだった。昨日の一件があつて俺の携帯にはアドレスと連絡先が入っている。

昨日の一件を忘れようとする奴なんてな、失恋を経験した青年期の男子ばりの現実逃避をしようとしている奴だ。

しかし委員長も凄いな、自分が委員長だと言うことを忘れて授業中にメールするなんて。自分から立候補しておいて自分の株を下げるようなことをするとは。

何という綱渡りのような行いだよ。

『俺弁当持ってきてるんだけど、二つ食うなんて無理』

恋愛経験も無い、ウブな俺は仕方がないので実際のことを書かせて貰い、メールを返した。こういうのは普通、気を使って食べるべきだよ。

それが俺には出来ないから、この道を選んだんだけど、何か？

『私がソレ食べるから、私の弁当持っていないし』

……この女は流石だ。うちの高校は点数トップの人が入学式で宣誓を読むんだけど、それを読んだのが委員長だったという訳。

頭がいい人は発送の転換が強いと言う話だけど、今日それを知ったよ。

しかし弁当フラグだとは、メジャーなフラグだな。話によれば高校の恋愛においての弁当フラグは1+1の答えが2になると言っているくらい分かり切ったフラグだと言う。

『分かったよ、取り敢えず昼休みソレ食べるよ』

とだけ書いてからメールを返した。

授業へと戻ろうかと頭を切り換えたその時、目の前に先生が金剛力士像のように立っていた。

「オイ水村、携帯没収な」

「……はい」

この先生、理科基礎の担当であり俺のクラスの担任の先生だったから良かったんだけど、他の先生だったらどうなったか。

しかも俺の目の前にいるから何か怖さ倍増なんだけど。

「しかし水村、お前は何で携帯使っていたんだ？」

「メールが来ました」

「誰からだ？」

委員長です、と言いたかったところだけど、俺は言わない理由が二つあった。

一つ、委員長自身が鬼の形相で俺を見ていた。その鋭い視線はまるで槍でも投げているんじゃないかと思うほど痛かった。

さらにもう一つ、委員長のアドレスを何で知っているかと言いつことになる、しかも俺は委員長の奴隷であり彼氏だ。彼女を売る訳にはダメだろう？

「親戚から何故か来てました」

「そうかそうか、まあ良い、放課後に科学室に取りに来いよ」

適当に嘘を付いてからこの話は終了。

俺は先生の持っていく携帯電話をドナドナよろしく見送っていく羽目になってしまった。

*

さて、待望の昼休み。

メールでの会話で委員長言うからには先に屋上へ上がって待っている、だそうだ。またまた屋上で昼飯を一緒に食うとはベタな展開だなあ。

「お待たせ、お弁当持ってきたよ」

委員長の声が聞こえてきた。俺の十五年間の人生でもこんなことは初めてだな。

中学校時代、彼女のいる奴にリア充リア充って冷やかしたりしていたんだけど、まさか俺がこんなことになるとはビックリだな。

立場が変わればどうなることやら、180。世界だって変わるはずだぜ？

「あ、ちょっと待って、はいコレ」

俺の手に丸い何かが渡された。何だろうな、と思いつながら俺は手を見てみると、その丸い物体は何故か200円。ちよつと嫌な予感。奴隷だからって俺に飲み物か何か買いに行かせるつもりか。

「そうよ、あんたの飲み物も買っても構わないからオレンジジュース買ってきて」

「はあ!?!」

「あれ、私の奴隷になるって言ったわよね、あのこと広めてもいいのかな?」

「すいませんでした買ってきます!」

俺は弓矢のように背筋をピンと伸ばしたかのようにして、海軍のように敬礼。こんなに従順に動いている俺がちよつと怖い。

その状態からロケットスタートを切った某陸上選手にも引けをとらない速さで自販機のある三階まで階段を駆け下りた。

200円を自販機にぶち込んでオレンジジュースを二本買うと俺はそのスピードで屋上へと戻った。

「買ってきました、ご主人様」

「ご苦労様」

何故かご主人様とまでちゃっかり言ってしまう俺が情けない。中三の妹だっているのに何故に俺は奴隷にすらなっているんだろう。純粋な妹にこのことを知られたらどうなるだろうか。

俺に女子の友達がいた頃に家に連れてきたら『お兄ちゃん不潔っ!』って涙目で叫ばれたんだよね。こんなこと言っておきながら純粋なのかどうか知らないが。

「はい、お弁当」

「じゃあこれが俺のな、多かつたら言えよ」

「こういう可愛い女子って料理が壊滅的に下手って言うこともあるじゃん。ら×すたに出てくるか×みとか、グレン×ガンのニ×とかが具体例だな。

そんな感じでおそろおそろ弁当を開けたんだけど、結構見た感じは……何かすっげえフツーですね、委員長さん。

ちよつと待てよ俺、味が壊滅的って言う場合もあるじゃねえか、普通でも味はどうなんだよ。

おそろおそろ、弁当の中に入っている野菜炒めを口へと運ぶ。そして、咀嚼。

「味だけど、どうかな？」

……普通に美味しいじゃないですか、委員長さん。家に一人くらは欲しいですね、メイドさんみたいな感じで。俺からすれば俺のご主人様ですけどね。

取り敢えず料理に関しては下手じゃなくて良かった。料理下手な女性が彼女に来るようであればそれはルーの入っていないカレーと同じようなものだ。

「委員長、美味しいよ、普通に」

「本当!？」

「うん、本当に。めっちゃ美味しいんだけど」

「良かったあ……」

安堵の表情を見せる委員長。俺もそれ見ていると和むんだけど、委員長の安堵の表情にはリラックスを促す効果でもあるんじゃないのかと思うほど和むな。

そんな時だった。

「……あれ、水村君だよな、委員長と何しているの？」

「お弁当食べてるよ？」

「マジ!?!」

何と言つことだろうか、一年の女子三人組がこっちを見ているじゃないか。

これはダメだ、俺の命が危ない。言いふらすような真似をすれば俺の命が危ないぞ。一年生中の男子を敵に回してしまうこととなる。今すぐ誰か、愛の戦士マ×ラ13を呼んでこい。『人の恋路を邪魔する奴は消え去れ』と言つ名言を吐きながらあの女子三人組を抹消してくれる筈だ。

「委員長、これはマズいな、逃げるぞ」

「ええ」

俺は箸を二、三口しか付けていない弁当を何処で学んだか分からないような早業で片付けて逃げようとした。

しかし、時既に遅し。女子三人組は階段の所から消え去っていた

のである。

「……見られちゃったか、どうしようか」

「仕方ないわね、あの人たちをデ×ノートに書くしか」

「そんなネタ何処で知った!？」

これは冗談では無いぞ、委員長。お前は良いにしても俺が一番ヤバイんだ。告白して儂く桜のように散っていった男子に恨みの念を
買うこととなってしまう。

……さて、高校に入ってから俺は様々な不運な惨劇しか起こって
いない気がするんだが。

第三話 目玉焼きは半熟の方が良い

【第三話 目玉焼きは半熟の方が良い】

俺と委員長が付き合っているのが皆にバレてしまいながらも俺は何とかゴールデンウィークへと逃げる事が出来た。色んな奴からそのことについては結構聞かれたなあ。

マスコミに囲まれて色んなこと聞かれる芸能人の気持ちをよく知ったよ。

そんなこんなでこの連休、やることもないし俺は部活もしていないので仲の良い俺を含めた四人組で遊びに行こうかとも計画していた。

両親は仕事で海外に行くみたいだし妹に関しては中学校の部活の合宿で家には居ない。

一人暮らしと同じ状況に俺はいると言う訳なのだよ？

「一人でいるのって凄く自由だなあ、憧れるな」

家でぼんやりといるだけだけど、何よりも親がいなくて自由だから頭のネジがボロボロと取れていくんだよね、大学生の気持ちがよく分かる。

そんな自由な時間も俺が朝飯の目玉焼きとかをむしゃむしゃと貪っていた時を境に崩れて行くこととなった。

一本の電話をキャッチした俺の携帯がいきなり鳴り響いた。
電話の主は勿論俺のご主人様。こんな時に奴隷だからって呼ばなくても結構でしょ。

「もしもし?」

「あー、光輔君? 私だよ、璃桜」

いやそんな分かるよ、声からしても分かるし電話帳登録してるから分かるよ。

「用件は何だよ?」

「光輔君の家って誰かいる? 両親とか妹さんとか」

「いねえよ、それでどうしたんだよ」

大体この話の流れからしてもう何を言い出すかは分かるんだけど。

「遊びに行っても良い?」

ホラ来ました。何かのフラグが立ちましたよ、何だよ俺の人生がまるでギャルゲーと化している気がするのだが?

どう回答すれば良いんだろつかない、困ったな、家に女子が来るなんてマジで初めて。それで変な展開に進むなんて俺はゴメンなんだけど?

「ゴメン、無理だわ」

「……あ、そう、分かったわ」

「うん、じゃあまあ連休明けにな」

そう言っ て電話を切ろうとした瞬間

「じゃあ、意地でも家を探して遊びに行くからね」

と残して電話の切れる音がした。

……怖っ！ 何！？ 浮気した夫を捜しに行く人妻みたいなことを言っ て電話を切ったぞ！？ 何か俺の家に来たときにナイフとか持っ てきそうなんだけど！？

て言っ つか委員長の声が凄く怖かっ たんだけど！？ 火サスに出てくる女性の容疑者役の人の声と瓜二つだっ たんだけど！？

「……いやいや、これはもう家から外に出れないかもしれないかもしれねえな」

冷や汗でぐっ しょりと濡れた背中 of 感觸を気持ち悪く感じながら俺は固まっ た目玉焼きの黄身を口に運んだ。うわあ、完璧に固まっ てるよ、不味い。

*

晩飯も作るのが面倒だったので買い置きの手×ンラーメンを美味しく頂いた俺はもう寝ようかなと思っていると玄関のインターホンが鳴り出した。

どうせ父さんがオークションで何か買ったんだろうと思いつながら出ることにしたが、思いがけない訪問者であった。

委員長だった。

「……………はい？」

俺は本当に文字通り目を丸くした。何故か水でも被ったかと言うくらいずぶ濡れ。そう言えば夕立で雨が降ったけど、まさか……………雨の中俺の家を探していたのか？

と言うかお前そんなことしてまで俺の家に遊びに来たいってどんな執念だよお前。

それ以前に両親とか心配しているんじゃないのか？

「風邪ひくぞ、聞きたいことは山ほどあるけど取り敢えず中入れよ」
「……………」

委員長は何も言わなかった。本当に抜け殻みたいに反応してくれねえ。目だつて本当に死んだ魚みたいに虚ろなんだけど。

「シャワー使えよ、体温めてこい」

「着替えとか……持ってないんだけど、どうしよう」

「妹のがあると思うから、取り敢えず今日はそれ使え」

口をようやく開いてくれたんだけど、それが着替えの心配ってどうなのよ？ 色々と気を使っているのに着替えの心配って心外なんだけど。

『お茶とコーヒーどっちが良い？』って聞いて『いや、それ以前に入れ物が嫌なんだけど』って言われるのと一緒にと思うぞ。

委員長がようやくシャワー浴びに行ったようなので俺は安堵した。長かったテストが終わったときの安堵する感じと今の感じが似ているんだけど、この達成感みたいなのは何なんだろうか？

「……何で委員長来たんだろう？」

それにしても一番気になるのはそのことしかない。他のことを一番気になることとして挙げる人がいるのであれば、ソイツには超一流の医者がいる脳外科を教えてやる。

親と喧嘩したから家出でもして来たのか？ いや、委員長はそんな喧嘩するような奴じゃ無かったと思うぞ、親とは仲良さそうだった。

たし。

いや、もうそんなの分かる訳も無いか。

どうせ考えても頭が痛くなるだけで仕方が無いので俺は考えるのを辞めて、茫漠とした時間を過ごすこととした。

「ふう、光輔君シャワー浴び終わったけど、妹さんの部屋って何処かな？」

「あ、説明しようか？」

「それとこっち向いたらダメよ、下着しか着てないからね」

……な、なんだってー!？

思春期の男子としてはどうなっても良いので見てみたい気はするんだけど、説明しないと裸姿でいてもらうことになるので俺は説明をしようとした。

が、残念なことに説明力の無い俺にとって口で妹の部屋を説明するのは難しいのであることに気付いた。ナンテコッタイ!

指でこう、方向を指しながら説明は出来るんだけど、困ったな、どうしようか。

「早く説明して、風邪ひいちゃうでしょ」

「分かったよ、俺が実際に案内するから」

「……あっ」

何と言っことだろうか、俺と委員長の目が合ってしまった。さら

に委員長の下着姿まで見てしまったと言う醜態。……まあ、それは良いんだけど。

よく雑誌で水着姿のモデルさんとかいるけどさ、そのモデルさんにも引けをとらないスタイルで、某カジノディーラーみたいなスタイルだな。しかも偶然にも名前だって同じ。

いや、ちよつと待てよ、コイツの脇腹の色が何か変だぞ？ ……
何て言うか瘡みたいだな？

「……っ」

すすり泣く声が聞こえたかと思っただけで、委員長の顔を見れば、ふるふる震えながら涙目になっている。嫌な予感しかないんだけど。そして委員長は近くにあった俺のマグカップを手にとって、

「いやあああーっ！」

と叫んで俺のデコの丁度真ん中に、そのマグカップをダグッッッッのようなフォームで投げってきた。……南無三。明日俺が目覚ますようなことがあれば良いんだけどなあ。

血の生暖かい感触を感じながらファミコンのカセットのデータのようにな、俺の記憶は飛んでいくこととなったのである。

第四話 女の買い物は長い

【第四話 女の買い物は長い】

今日は俺と委員長で、二人で近くのショッピングモールのイxnに買い物に来ている。

委員長が機嫌を悪くしてしまったので、俺は太鼓持ち芸人のように機嫌を取る為に、こういう感じで買い物しに来たって言う訳だな。昨日の下着姿を見てしまった為、決して混じることがない天国と地獄の双方が一気にやってきた。

「委員長、何か買いたい物とかあるか？」

「……」

三点リーダは委員長のものである。何故だか、委員長が某アニメに出てくる宇宙人と化している気がするのはいのせいなんだろうな。唯一違う所はリスの頬袋みたいにブーツと頬を膨らまして拗ねている所だけ。

「何か買ってやろうか？ そんな怒らなくても良いじゃねえかよ」

と、機嫌を取ろうとしたところ、蛇にらみをも凌ぐほどの目で睨

まれた。

これはWBC日本代表のキャッチャーでも取れないようなワイルドピッチを投げたような気がするな、委員長はそりゃ取れねえだろ
うよ。

「
……」

結局気まずくなる。俺は結婚式のスピーチで新郎新婦の名前を間違えてしまった新郎の友人みたいな顔をしながら、委員長から目を逸らした。

相変わらず俺の右からは委員長による痛い睨み。何だかボウガンを発射しているような睨みだ。

この雰囲気は思い出したくないあの日の出来事を彷彿とさせる。

「ねえ、光輔君」

重々しい空気から声を聞いた委員長。

その声は懐かしさを感じられるほど久しぶりに聞いた声だった。

「ゲーセン行かないかな？」

「まあ……うん、そりゃあ構わないけど」

委員長がまさかのゲーセン行きたいです発言。お前、委員長にゲ

「センとか似合わねえな、毎にマスタードかけて食べるくらい似合わねえぞ。」

「と言うかゲーセンって言ったとしてもメダルゲームするか音ゲーするかだろ？」

「委員長何のゲームするんだよ？」

「クレーンゲームがしたいのよ」

「……あれってさ、凄くお金かかるんだけど？」

「それが嫌なら一回で商品を取れば良いんじゃないのかしら？」

「他人事ですか？」

この女は何てことを言いやがる。ゲーセン暦4年目にもなるこの俺がクレーンゲームでフィギュア取るうとしたとき何円かかったと思っただいやる。

クレーンゲームってコツが掴めたら簡単になるとか言うけどな、そのコツを掴むことはドラ×エ5において、は×れメタルを仲間にするほど難しいぞ。

「ゲーセン暦何年だお前は。」

「1年目だコノヤロー！」

「宇宙バカな侍みたいなノリで解答するの辞めましようよ!？」

「まだ素人なのよ」

「と言うか俺は俺の心を読んだことに関して驚きだよ！」

ふと思ったが、さっきの雰囲気は何処へ去っていった。今の雰囲気は台風の中心がやってきたみたいに不気味なだけ。

と言うか、もしも今いるのが台風の中心だったとしたら再び重々しい雰囲気来ちゃうよね？ 俺は、それだけが再び来なければ何でもいい。

「クレーンゲームって言っても、何の商品が取りたいんだよ？」
「ソレ」

指差した先には色々な顔文字を小さい人形みたいにした物だった。確かに可愛いけど、委員長こういつの興味有るのか？

「可愛くないかな？」
「まあそうだけど、やらないのか？」
「あんなにやって欲しいんだけど」
「いやいや、やりたいって言ったの委員長でしょ!？」

言ってることと希望していることが矛盾している。これが矛盾じゃないとでも言うので有れば楚に矛と盾をひさぐ者がタイムマシーンに乗って抗議に来るぞ。
と言うかこの命令を了解しないと、今の状況は台風の中心からズレた所に行ってしまうな。

「仕方ないな、やってやるよ」
「ありがとー」

何とも棒読みだな。素人の役者でもこんな棒読みはしないと云うくらいの棒読みだ。感情がこもってすらいないんだから。

*

……ついカツとなったかどうかは知らないが、五分ほどで1000円使ってしまった。

結局それでも取れなかった俺は委員長に冷ややかな目で見られながら断念することとなった。

「委員長、何かゴメン」

「……」

あの空気がカムバックしてきた。正直カムバックなんてして欲しくないモノが帰ってきてしまったことが虚しすぎてどうしようも無いのである。

そんな嫌な雰囲気が続いて、俺の恐れていたことが起きてしまった。

「……まさか、アレって」

「どっしたの？」

「いや、妹がいるんだよ、合宿の筈なのにな」

目線の先の女子らが着ているのは妹が着ていたので見覚えのある
ジャージ、背中には妹の出身中学と部活が書かれている。

俺と委員長が付き合っていることがバレちゃったらどうなるだろ
うな、純粋な妹は飢えに耐えきれなくなった猛獣のように発狂して
しまっぜ。

さらに委員長も、俺の横で何か恐れていたことが起きてしまっ
ているようだ。委員長は俺の横で餌を食べようとしている金魚みたい
に口を開けている。

この様子から委員長に何か恐れていたことが起きたことを感づけ
ない人は鈍いと言っことにしてやる。

「光輔君、逃げよう」

「はあ？」

「良いのよ、事情は後で話すから。妹さんだっているんでしょ？」

何だか、妹にバレたらどうしようも無いことになると言っこと以
外は訳が解らないのだが。

俺たちはそう言っ訳で、その場から逃げることとなった。

第四話 女の買い物は長い(後書き)

初めまして、蒼雷です。

私は高校生な者ですから、更新速度はカメ並に遅くなります。

申し訳御座いませんが、宜しくお願いします。

では。

第五話 異性の友達を家に呼ぶ時は両親や兄弟の居ない時に

【第五話 異性の友達を家に呼ぶ時は両親や兄弟の居ない時に】

本能的に危険を察知した俺たちは、気が付くと店の外の自販機で缶ジュースを買っていた。そのまま家に戻ることとなったのである。取り敢えず委員長の危険を察知した理由を聞くことにしようか。

「何で委員長、逃げることになったんだよ？」

「妹さん達の近くにんだけど、ピアスをした金髪の女性がいなかったかな？」

「ああ、見たよ」

確かに見た。アレは怖そうだったな、本物の幽霊に出会った時の恐怖感にも劣らないほどの怖さを俺はその時覚えたぞ。

で、その人がどうしたんだよ、まさか親戚だとか？

「ええ、その通りだけど……あの人は私の義理の姉」

何という姉妹間のギャップだ。義理の姉とは言っても委員長のイメージだと才色兼備なお姉さんを想像するはずなのに、あんなチャラいて。

人は言う筈だぜ、『兄弟は確かに一方が凄くて別の方が変ではあるが、その兄弟間のギャップの謎と言うのは現代科学を持ってしても証明不可である』と。

でも何で義理の姉だよ？

「親戚なんだけどね、交通事故で両親が亡くなったのよ」

「それで……委員長の家に来たってこと？」

「まあそうなんだけど、何故か私とあの人は仲が悪くてね」

「色々大変だなあ」

成る程ね、これで謎が解けた。委員長が家に来た理由とか、委員長の脇腹の痣の理由。

お姉さんと仲が悪いつてことは喧嘩とかもするんだろう。それでつい昨日になって喧嘩してから家を出て来たってことなんじゃないのか？

痣のこととも関連付く。

お姉さんはきつと血の繋がっていない妹を羨ましく思ってるんじゃないのか？

俺には分かるよ、大体。

「家を出て来たのもその通り、喧嘩もしたのよ」

「でも、付き合いだしてから家には来なかったよね、アレはどうしたんだ？」

「あのお姉さんは大学生で一人暮らしをしているから」

「ゴールデンウィークだから帰ってきた訳か」

でもわざわざ俺の家に来たってことは、委員長がお姉さんに大してピザ屋のバイトでピザを届けに行ったらヤクザの家だった時と同じくらいの怖さがあるってことか。

さらに反抗するのはその家へとピザを届けに行くくらいの怖さがあるのだろうか。

あの金髪のお姉さんだと喧嘩するにしても勝ち目はないだろう、RPGでストーリーを進ませる為によく見る負け戦闘と同じような状況だ。

「仲良くなりたいたいんだけどなあ……私に何がいけないんだろう」

「大丈夫だって、相談くらいならしてやるから」

家庭の事情に首を突っ込むとかそういう話になるとモンスターペアレントばりの親バカ改め彼女バカになるのだが、相談くらいで有れば構わないだろうか。

俺だって一応でも何でも彼氏なんだから。

そんなこんな家に着いてしまった所で、これからどうするか策を練ることとするか。

一つ、恐れることが無ければ良いんだが。

「ただいまー」

「ああ、兄さんか、お帰りー」

……あ。天変地異とか隕石激突とかそう言う感じのモノよりもっと怖い、俺の唯一恐れていたことが起きてしまったぞ。妹が帰ってきているだと!?

「何処行つてたの?」

「え、ちよっとコンビニに……まあ昼飯でも……買いに……かな?」
「どうしたの、声震えてるじゃん」

二階の階段から日焼けした華奢な身体が見えてきた。間違いない。シヨップングモールで見たジャージと同じだな、アレは妹だ。

何故妹が帰ってきてやがる、合宿は? この状況って新手の詐欺か何かなのかな、俺を陥れようとするスパイの策略に違いあるまい。

「合宿は?」

「ああ、雨降ったからね、グラウンドが使えなくなっちゃった」
「へ、へえー」

忘れていた。妹はソフトボール部なんだけど、雨降ったら合宿も元も子もなくなってしまうんだ。昨日は雨降ってたな、委員長がずぶ濡れだった。

しかも残念なことに委員長が今、妹の服を借りている。これを知られたら地球崩壊どころの怒りでは治まらない展開になるぞ。

因みに噂だと、妹の中学校のソフトボール部はどういう訳か可愛い女子だらけで、本当に体がボディービルダーよろしく鍛えられた女子なんて一人として存在しないらしい。

そんなおかげで妹は男子からも女子からもモテモテなんだって。

「昨日ねー、キャッチャーの練習やってたらケガしちゃってねー」

「あ、そうなの？ 病院とか行かなくて良いのか？」

妹は俺なんかよりも遥かに身体能力が高くて、その身体能力を買われてかシヨートとかセカンドとか色んなポジションを守っているのだ。

で、合宿で九つもあるポジションの中で一番難しいキャッチャーをやってみたと言う訳なのか。

「まあ大丈夫でしょ、そんな損傷してな……」

階段を降りてきた妹は隠れようとしていた委員長存在に気が付いたようである。と言うか委員長も隠れられるスペースなんて無いのだから隠れようとも出来なかったのだが。

妹の顔を見てみるとネズミを見た某猫型ロボットのような顔をしなから顔色を他の色へとチェンジ。

その状況から昨日の委員長のように目に涙を浮かべて……

「兄さんなんて最低っ！」

俺の耳の穴を劈くかのようなソプラノシャウトをお見舞いした。

*

「私は兄の光輔の妹になります、水村悠里」

「宜しくね、私は早乙女璃桜」

ソプラノシャウトから10分もしないうちに打ち解けた悠里と委員長。悠里は何にしても呑み込みが早いって言うけど、こういふことについても呑み込みが早いとは。

嫁と姑のような関係に等しかったのに今はもう仲良い姉妹のようになっているとは。

委員長も誤魔化すのが得意なのかどうか知らないが、転校した俺の幼なじみでこの街に帰ってくるから久しぶりに会いに来た、と言って誤魔化したぞ。

「これで兄さんも彼女いない歴15年じゃなくなったね」

「ほっとけ、うるせえよ」

「いや、でも一度女の子連れてきたっけ？」

「お前もイケメンの男子連れてきただろうが！」

こいつは不潔とか人に言うっておきながら彼氏とかいるらしくて、

女子からも告白されるから酷い噂ではレズとか言われているらしい。週刊誌にでも取り上げられたら芸能界がひっくり返るようなスキャンダルが発生するぞ。

まあでも妹にそんなことがあれば俺は一族として反乱を起こすだろう。

「先輩も来て居るんだし、これからどうするかな？」

「いや、先輩って委員長のこと？」

「そつだよ？」

いや、ちょっと待て。委員長の名前が某ディーラーと被っているんだからお前が先輩とか呼び出したらドジっ娘のあの後輩になっちゃうぞ。

別にお前が決めたのなら俺は止めようと思わないのだが。

「さて、じゃあまた何処かへでも出かける？」

「どうせソレしか無いよな？」

「そつでしようね、行きましようか」

どうせ出かけるところもコレと言ってそんなに無いんだけどね。しかし、このことが思わぬ事態を引き込むことになるうとは俺にも委員長にも知る由は無かった。

第六話 姉妹は大切にしろ

【第六話 姉妹は大切にしろ】

「……で、結局はここに来ちゃうのか」

「そんなの遊ぶと言っても遊べるようなところが此処しかないじゃないの」

「いや、知るか」

悠里が遊びたいと言っておきながら結局同じ所に来てしまったぞ。遊ぶところが一箇所とか毎日何かを食べ続けて飽きる感覚と同じになるぞ。

しかしまあ遊ぶ場所も此処しかないよな、俺も何人が友達と遊びに行くとしても此処くらいしか遊べる場所が無い。

「取り敢えず色々と回りますか先輩？」

「私は光輔君と行ってくる場所があるから、一人で待っていてくれないかな？」

「ええ、良いですよー」

それだけ聞くと、悠里は嫌いな奴が入院したと聞いたときに引けをとらない嬉しそうな表情で何処かへともなく消えていった。

でも委員長は俺と行くところがあるとか言っただけで一体何する

んだろう？

俺は何も聞いていないぞ。

「説得しに行くから、横で見ている欲しいの」

「……え、何？」

「いや、だからお姉さんを説得しに行くのよ」

いきなりですね、藪から棒とか言うけど今の状況は藪から槍でも飛んできているんじゃないのか？

俺が横で説得を見ていて欲しいとか言っても、何をすれば良いんだよ。横でいるだけとか通訳の人よりも仕事少ないぞ。

通訳の人はなあ、意外と仕事がなさそうに見えていながら結構仕事があるけど、俺の場合だと完全に仕事すらない上に野次馬と変わらんぞ。

ちょっと待て、お姉さんに説得しに行くのは良いとしてもお姉さん何処にいるんだ、携帯で電話して此処まで呼ぶのか？

「いや、あの人の行動パターンはド×クエのラスボスくらい分かりやすいわよ？」

「何でそのゲームやっているのか不思議だし、色んなゲームに出てくるボスの行動パターンの解析って結構難しいんだけど!？」

まあド×クエ9は幅広い年齢層ゲットしたって言う話だけど、女子も結構やっている人いるのかな？

それは良いとしてもラスボスの行動パターンと、お姉さんの行動

パターンの解析を軽々とやってのけるとは何とも凄い、ゲームのレポート書かせたら10枚くらい仕上げてきそうだな。

「多分あの人は……本屋で立ち読みでもしていると思う」

「何を根拠に？」

「基本的に休みはあの人、ライトノベルとか色々立ち読みしているわよ？」

「ああ、そうなんだあー」

何とも感情のなさそうな棒読みだろうが、俺の長い16年の生活の中で三番目くらいに感情のこもっていない棒読みをしたことだろう。

と言うか自分の姉の行動パターンすら解析するとかそんな能力持っているのならスパイか何処かの機関の諜報部員くらいにでもなれるんじゃないのか。

「ここが本屋ね、向こうに居る人がそうなんじゃないかな？」

「確かにあの方はゲーセンで見たな、……委員長の言う通りじゃねえか」

「最近のお気に入りには経済学で有名な本を読む高校野球のマネージャーの本だって」

「古え！　と言うか言い回しが回りくどいー」

俺もまあ中三の時に学校の図書室で借りて読んだけど。回りくどい言い方なのは作者が伏せ字使いすぎるのも悪いと思ったからとしておこじろ。

ふと思ったけど意外と委員長のお姉さんまともだなあ。あの本つて髪の毛金髪の人が読む本なのか！？

「あの人は根は真面目だからね、髪を染めたのは大学から」

「楽しすぎて髪の毛染めちゃったのか？」

「そうでしょうね」

大学生つて楽しすぎて骨抜きになってしまっつて真実だったのか。最高峰の大学の学生なんて頭は良いのに滅茶苦茶楽しそうな表情しているしなあ。

と云うか楽しすぎて金髪に髪を染めるとか、晩ご飯がカレーだからと云って喜び狂う子どもと同じくらい楽しそうだなオイ。

「そう言えば説得説得つて云うけど、何を説得するんだっけ？」

「言い方悪かったわね、仲良くしてくれない理由を聞くのよ」

ああ、成る程ね。最初からそう言ってくれないと分からないだろう。

と云うことを思っていたら委員長は既にお姉さんに声をかけようとしていた。………というか、既に声かけちゃったよ！？

「ねえ、お姉さん」

「璃桜じゃん、どうしたの？ 下らない用件は聞かないわよ」

「ちよっと話して欲しいことがあるんだけど」

「じゃあ早くしてよ？」

何かしゃべり方すら怖い気がするなあ。俺も悠里に冷たい態度取ることはあるけど、このお姉さんは氷点下の時よりも冷たいしゃべり方をしてやがる。

どうせ二重人格かもしれないぞ、基本的に家の中では酷いけれど学校とかになると打って変わって優しかったりとかするのかな？

「何て言うか、相談なんだけど」

「此処でしなくても良いんじゃないの、家でしてくれないかな？」

「そんなこと言うなよアンタ、妹だろう？ 相談くらい聞いてやれよ」

何故だろうか、俺は今にも切れそうな輪ゴムが切れてしまったかのように頭の中で何かが切れた。姉妹なんだから話くらい聞いてやるのがスジだろう？

姉妹間で当たり前前のが出来ないとそれは姉妹失格だと俺は思っぞ。

「……分かったわよ、貴方が誰か分かりませんが」

「私の彼氏よ、光輔君は」

「え？」

大胆にカミングアウトしているんじゃないやありませんよ委員長。そんなカミングアウトいらねえ、テレビの良いところで挟まれるCMくらいいらねえ。

そんなこんなで本屋から場所を変えた俺たちは本題へと入ることに。

「まあ光輔君の件は後で話してあげるわ、さて例の件に」

「ええ、簡潔に話してね」

「何で私にそんなに冷たい態度を取るの？」

「……」

おお、お姉さん黙りこくってしまった。この状況は気まずすぎる。女子に手を出してしまった時の状況と同じくらい気まずいな。

でもこの気まずさと言うのは種類が違う。何か聞かれて困ることを聞かれた気まずさと女子に手を出してしまったという気まずさは全然種類が違うぞ。

「羨ましかったからかな、私はお母さんともお父さんとも血のつながりが……ね」

「血のつながりなんて別に良いの、私とお姉さんは姉妹なんだから」

もっともその通りだ、良いこと言っぜ委員長。この展開はドラマみたいなのだが、こんな感じは初めて経験した気がする。何とも素晴らしい和解だろう。

「……うん、ありがとね」

「良かったら、これから仲良くしてね」

「勿論だよ」

場所を変えたから周りには人がいなかったけれど、泣くこともなく涙を堪えていたお姉さん。そして嬉しそうな表情をしている委員長長。

俺はコレで良かったんだろうな、と二人を見守っていた。

*

ゴールデンウィーク最後の日。

お姉さんが帰ったと言う報告が委員長から来たのだが、本当に気まずかった仲は嘘のように良くなったらしく委員長の親はそれを見て卒倒する程ビックリしたらしい。

何か色々と大変だったなあと思っているとメールが一通。

『ゴールデンウィークも終わったし、次は体育祭だね』

……あ、今度は体育祭かあ。委員長が来ていたおかげでその存在を忘れていた。

雨が降らないように二人でてるてる坊主でも作ってみることにするか。何とも古典的な神頼みなのだが、やらないよりマシだ。

『じゃあな璃桜、明日でてるてる坊主でも作ろうぜ』

とメールを返した。メールって短くて分かりやすいのが良いんだって。そう言う訳で俺は味付けの薄い料理くらい淡泊なメールをいつも書いているぞ。

ただこのメールで変わったことと言えば、『委員長』と呼ばずに『璃桜』と呼んでいることである。

まあ隠し味程度だな、この隠し味に璃桜は気付くだろうか。

「さてと、ゴールデンウィーク最後の日を満喫しますかな」

俺は携帯電話をポケットにスロットインして、部屋を後にした。

第六話 姉妹は大切にしろ（後書き）

どうも、蒼雷です。

あ、本編ですけど続きますよ？ 何か終わりっぽいけど次は体育祭ですからね！？

申し訳ございませんが、諸事情で色々と言得（？）の場面はスツと進ませて頂きました。

それにしてもこの話、悠里さん放置プレイですね、分かりませ（死ね）そう言う訳で次は体育祭編へ入ります。

それでは。

第七話 運動会のラジオ体操の存在意義は不明

【第七話 運動会のラジオ体操の存在意義は不明】

五月某日の翔鳳高校近隣の陸上競技場。

いや、何か大きな事件でも起こったかと言うくらいオーバーな始まり方だけど、体育祭があるだけでそんなに大きなことは無いぞ。そうそう、翔鳳高校って言うのは俺たちの高校の名前。近くには悠里の通う中学校もあるんだって。

しかしまあ体育祭を陸上競技場で行うとかアメリカの農業ほど大規模だな、大して人が来る訳でもなさそうなのに。

と言う訳で俺は今入場行進の為に入場ゲートで待機している。

『入場行進は1-1から始まって、トラックに沿って進んだらトラックの内側へ向かって下さい』

行進の順序だけど、簡単に言うと陸上のトラックがあつて、そこを行進して行って、半周くらいしたらフィールド競技をトラックの内側に行くってことだろう。

委員長は前に行くんだけど、女子はプラカード、男子は学級旗を持つらしい。女子っていつもプラカード持つけど何でだろう、不変の真理なのか？

「ちょっと光輔、相談があるんだけど」
「おうどうした」

俺に話しかけたのは男子委員長の神坂潤平。彼は男子委員長を決める時ジャンケンをして負け残ったと言う疫病神に取り憑かれたかと言うほどのアンラッキーマンなのだ。

しかしお前委員長なんだから前行かなくて良いのかよ？

「いや、俺は陸上部だから用具の用意と片づけをやって」

「……は？」

「そう言う訳だ、お前実行委員だろ？ 幸せにな」

「ちょっと待て」

幸せにな、ってどういうことだよ。何かもう璃桜と俺が結婚するみたいじゃねえか。まだキスもしてないのに光の速度よりも気が早いぞ。

とも言わないうちに潤平は逃げていくかのように去っていった。

アイツ次に俺の所に来たらコロス。

さらに俺の手には学級旗を持たされていた。まあそんなこんなで俺は学級旗を持つての行進を余儀なくされたのである。

「全く、アイツって奴は」

「え、光輔君が行進するの？」

「そうなんだよ、聞いてくれよ璃桜、アイツったら陸上部だからって俺に大役押しつけて」

「まあまあ、頑張ろうよ」

その一言と共に、ニコ×コ動画の動画ランキングの上位を狙えるくらいの微笑みを俺に見せてきた。

今の微笑みを世界に振りまくことが出来れば世界から戦争が消えるだろうな。

『では入場行進及び開会式を始めます』

と、アナウンスが流れてきた。俺らのクラスは1-6だから六番目に行進するのだが、何でもかんでも1-1からと言うのは可哀想だろ。

こういう時は良いだろうけど一度だけ先生の会では1-1担任の先生から意見をいうことになっていたんだけど、その先生が何でもかんでも1-1からは変だとキレたんだって。

それ以降翔鳳高校の先生の間で『いつもセオリー通りなのはダメだ理論』が確立されたらしいけど、そんな論理は円周率は3か3.14かと言う議論くらいどっちでも良い。
と、考えていると次は俺らの行進だ。

『クラス紹介、1-6』

そつだ、クラス紹介も入るんだっけ。確か璃桜が書いたとか言っていたな。

『私達1-6はいつも明るく、入学して直ぐぼぼぼくと友達が増えたクラスです』

公共×告機構のCMでおなじみのあのフレーズが何故に使われて居る……だと!?

ぼぼぼくと友達が増えたって不意に現れた訳じゃないよ、元々1-6として集まったメンバーがそれぞれで友達を作っていたんだよ!?

『私達は体育祭に向けて一生懸命練習していました』

体育祭の練習の話を書いていないから練習の様子が分からねえだろーが。

つい最近までお前とお姉さんの仲直りをさせていた所だぞ、『以下は想像にお任せします』とか言い出すと見て頂いている方に対する放置プレイみたいじゃねーかよ。

失礼極まりない行為だな。

『これまでの成果を生かして優勝をつかみ取りたいと思います』

つかみ取りたいとか何か怖い。ホラー映画とかでゾンビが主人公の首を掴んでから空中に持ち上げる場面を思い出したんだけど。

優勝も同様にしてつかみ取るとか嫌なただけ。

『どうぞ、応援を宜しくお願いします』

最後はまあ……普通に真面目だな。

流石に最後までもクラス紹介が天然ボケの人ばりのブツ飛びを見せているとダメだろうよ。

*

さて、開会式スタート。さっきアナウンスで『では今から開会式を始めます』だって。

開会式って言うてもどうせ校長の挨拶とか聞いて終わり……じゃないのか？ どうせ校長の話だから長いはずだろうよ。

溜息を吐いてちよっと横を向いてみると、校長が話し出した。

「皆が楽しみにしていた体育祭が今からスタートします、頑張ってください、以上です！」

校長の話短っ！ 普通はここは長々と話すよね、何処かのよく居そうなジジイみたいに同じような話を延々としたりとかしないのか？

俺らの高校の校長は話が短いことで有名とか一度も聞いたことな

いぞ。

『ではプログラム一番、ラジオ体操を始めます』

……いつも思っただけど、このラジオ体操って必要なのか？

と知っているのと恒例のあの音楽と『背伸びの運動から』』と言うお馴染みの声の流れてきた。

「なあ璃桜、ラジオ体操って必要なのかな？」

「知らないけど、ストレッチとかになるんじゃないの？」

「成る程ね、確かに」

「スポーツする為にストレッチは必要なもの」

璃桜ですら知らないこのラジオ体操の存在意義。不思議で不思議で仕方が無いのだが、それはどうしても知りたい訳でも無いのでスルーしよう。

どうしても知りたい人はググってみてはいかがな物でしょうか。

それにしてもラジオ体操の話は一部プログラムで確認した人以外は知らなかったようで、この音楽を聴いて度肝を抜かれた人も何人かはいる。

後ろでは男子共はナマケモノみたいなラジオ体操をしている奴もいるぜ。

「次のプログラムって何だっけ？」

「障害物リレーよ、私も光輔君も出るじゃない」

「あ、そうだったっけ」

「因みにこの障害物リレー、A×B48がテレビでやってるようなことをするらしいよ」

……璃桜、それは笑い事じゃない。

あの人たちは48人くらいもいながら皆テレビで粉まみれにされたりコスプレしたり大変なんだぞ、障害物リレーもきつと大波乱になるぞ。

「と知っている」と『では、のびのびと深呼吸』と言う声のトーンを高くした陽気なオッサンの声が聞こえてくる。ラジオ体操も終わりの予感。

さて、次の障害物リレー、俺と璃桜はどんな酷い目に遭うことだろうか。

ラジオ体操をしながら怯える俺は不安を予知していた。

第八話 障害物競走と人生は相似

【第八話 障害物競走と人生は相似】

『ではプログラム二番、障害物リレーに出る人は第四ゲートに集合して下さい』

来ちゃったよ、白昼夢と呼ぶべき体育祭史上最高峰の悪夢の競技が。

しかもこの障害物リレー、俺たちがすることが明かされていないので右も左も分からないどころでなく上も下もさえ分からないのである。

先輩が言うには「コーラ買ってきて頼まれた人がレタスを買ってくるくらいブツ飛んだことをやらされる」とのこと。

聞けばこの障害物リレー、プログラム三番男女混合ハードルリレーと選択だったらしくて二年と三年は全クラスハードルリレーを選んだらしいぞ。

と言う訳で来年からはこの障害物リレーは大幅に改変されるらしい。

「ではクラスの点呼取ります、1 - 2と1 - 5と1 - 6はいますか」

しかも生徒会の人から明かされた真実では出場クラスは三クラスだけ。普通はそれだけしか集まらなければ中止とかそんなのにするだろうよ。

と言うか今年までこの競技が残っていた理由が分からないのだが、この競技の生存の理由と恐竜の絶滅の理由の解析であれば前者の方が難しいと思うぞ。

「では、競技の説明を始めます」

此処は長々しくなるので俺が説明することとしようか。感想は後ほど。

まず男子が先に走って、その後に女子が走ると言うのが大きなルール。反則は勿論ナシ。

第一走、ぐるぐるバットで10回回って妨害のある平均台を渡って、第二走は借り物競走。

第三走、男子は1000mを一輪車で爆走してからパン食い競争をしてから女子にバトンパスし、女子は飴食いをしてから200mを爆走。

第四走であるアンカー、男子は炭酸一気飲みをする間に女子が早着替えをして、そのまま二人三脚をしてゴールだってさ。

……まあ各走者のすることの感想を言うと、第一走は完璧にウケ狙いですね、分かります。第二走は凄く楽っぽく思えてくるのは何故だ。

第三走の女子の飴食いは顔が真っ白になるんだぞ、そう言うのも配慮しろ、生徒会。顔真っ白になるとか江戸時代の拷問よりも酷いぞ。

そしてアンカーに関しては俺が出るんだから命が危ない。

「よくこんな種目でOK通ったな……」

この種目を考える生徒会も確かにドSの集まりだけど、先生もみんなのにOKを出す点を考えてみれば俺はこの高校に来るべきじゃなかった。

まさかこの学校は、世界有数のドSを集めているが一流大学への進学を約束されると言う恐ろしい高校なのかもしれん。

生徒会がドSと言う時点でどうかしている上に先生もこんなのじやマジでどうにかしてやがる。

内部からこの学校を潰そうと言う計画が発足しているとしても言うのだろうか。

「光輔君、私と男子が二人三脚だよ」

「……いや、その男子とやらは俺ただけだよ」

「えっ!?!」

二人三脚してからゴールとか本当にシャレにならん。結婚への道のりをこつこつやってアホみたいな障害物リレーでカップルを使って再現しないで欲しい。

どこかのテレビの再現VTRでも絶対に見られない物を俺らで再現するなんて無理。

さらに観客席にいる一年生の男子の皆様方が日比谷焼き討ち事件にも引けをとらないような暴動を起こすはずだろう。

野生の本能と言うのは怖い物で、人間が限界を超えるようなことがあればそれが引き出されるのだが今日正しくそれが起きようともしているとは。

「何だか恐ろしそうなんだけど、他の男子達が」

「そんなの気にしなくて良いんだよ、どうせ光輔君に嫉妬しているだけだしね」

「で、璃桜は大丈夫なのか？」

「普通に大丈夫だよ」

……大丈夫なのは良いのだがちょっと哀しいものがあるのは気のせいなのだろうか。

薄々気付いていたさ、俺がモテないことなんて。認めたくなかっただけなんだよ、真実を受け止められずに現実を逃避していただけなんだよ！

非を受け止めるなんてことは無防備に爆炎の中に飛び込んでみて無傷で帰ってくるくらい難しい訳では無いが、心をピストルで打ち抜かれるような何かがある。

どうでも良いが、最近俺は高校で話しているのは中学から仲の良い男子と中高含め仲の良い女子と、ほんの一部の高校からの男子の友達。

しかしもう男子に限らずリア充じゃない女子も俺を空腹に飢えたライオンが肉を見るような目で見てくるのは気のせいなのか？

「さて、じゃあ頑張ろうか、障害物リレー」

「うん」

まさに俺らの目の前には白昼夢が見えかけていたのである。

*

「では位置について、よーいドンっ！」

生徒会の女子の号令と共に、始まりを告げるピストルが空へ耳の劈けるような轟音を響かせた。

第一走の男子はバットを取ったかと思うと独楽が回っている状況を彷彿とさせる回り方でぐるぐるバットを行っている。

このぐるぐるバットは10回ほど回るのだが、意外と10回回るのはキツイのである。

現在の回り終えた男子の状況を見れば分かると思うのだが、何処に目がついているんだとツッコミを入れたくなるほどフラフラになっている。

この時点で観客席ではお笑い芸人のライブの観客席に引けをとらないくらいの笑いが起きている。

「何で観客席笑って居るんだろっ?」

「多分男子がフラフラだからじゃないからかな?」

現在トップの男子がフラフラなまま平均台に差し掛かった。妨害が入るんだけど、その妨害とやらは生徒会が行う上に、何処から借りてきたか分からない、ボールを入れると弾丸の如く発射させるマシンを使うようだ。

本格的にゴールデンに放映されるバラエティ番組にも引けを取らない種目だ。

しかもそのボールが人にぶつかった時の音が本当にリアルに痛そうなんだよね。

そんな状況もお構いなしに楽しむ、DSな生徒会の人たちに俺は目をやることとする。

「ふははー！ 悶え苦しむが良いわー！」

「ご愁傷様です、あなた方には何の罪も無いでしょうが」

俺はこの言葉を聞いてこの学校に来るべき人間でなかったことを俺は確信した。

前者のセリフを叫んだ人はまだ冗談に聞こえるので良いとするのだが、後者のセリフを叫んだ人なんて無表情で言った上に微かに悪魔の笑いを浮かべてやがる。

何故か男子はボールが当たると「む……無念！」とか「ア、アッ、アッー！ 痛え！」とかシャウトしている始末。

痛みに悶えながら平均台を渡り、先陣を切ったのは1-2。

ボールの当たったところが真っ赤になっているんだけどそれが水玉模様みたいでお洒落だなあ、なんて言っているような余裕はない。女子にバトンパスするけど、女子も男子と同じような結果になる

だろう。

「見るに耐えないのは俺だけかな？」

「と云うか、先生方は何で生徒会を叱りつけたりしなんだろうね？」

「そつだよな」

と云う会話をしている間に女子が競技を行っていたが結果は俺の予測通りだった。

特に女子は本当に男子に比べてダメージの蓄積が大きいのか、中には涙目になりながら平均台を渡りきる女子もいたほどなのだ。

そして第二走へとバトンパスを果たすのみである。

第二走は一番楽な借り物競走だが今までの状況と先輩の言葉を考えてみれば、DSの巣窟と化した生徒会がまともな借り物競走を行う訳がない。

おっと、1 - 2の男子が借り物を書いた紙を拾ったっぽいぞ。

「すみません、英語の出来る方いますかー!？」

何を叫びだしたかと思えば英語の出来る人。借り物でそんなのを借りれる筈が無いだろう。

となれば、まさか……!？

「あれ、借りてくる物が英語で書かれて居るんじゃないのか!？」

中学校の模試とかで見たこともあるだろうけど、上に問題文で『次の文が記す物を持ってこい』と書いていて借りてくる物に関する情報が数文書かれていたりするんだろう。

何とも陰気な嫌がらせを考えるな、この嫌がらせは嫌いな奴の机の中にかみ終わったガムを入れておく嫌がらせと何ら遜色無いぞ。

この種目は障害物リレーとかじゃなくて嫌がらせリレーと言うべきだろう。

「すみません、可愛い方いますかー!？」

「何を借りようとさせとんじゃああああっ!」

うつかり大声でツッコミ入れてしまった。もうちょっとホラ、生徒会の人オブラートに包んで言ってやれよ。

まずそんなの自分から名乗り出る人いない上に、生徒会の人だって好みがあるから何処までが可愛いのかと言うのは人それぞれだろう。

さて、最後の走者の借り物は何だろうか。

「誰か150円貸して下さい!」

もう大体予想はついたよ、『500mのコーラ』とかそんなのだろう、既に借り物じゃなくてパシリになっちまってるぞ。

波乱の障害物リレー、後半に続く。

第九話 炭酸一気飲みすると喉腫れるぞ

【第九話 炭酸一気飲みすると喉腫れるぞ】

さて、今は第二走の借り物競走が終了。

男子の方は意外とすんなりと終わったりもしたんだけど、女子の方の借り物は男子よりもマツ八三の速度よりもブツ飛んでいたのである。

その借り物は『キム×クばりのイケメン』と『最近告白した人』と『今までで付き合ったことのある人全員』などと言つ無理難題。

化学の元素記号の表の穴埋め問題よりも難しいと言つても過言ではない難しいこの問題を何とか終えた三クラスは第三走へとバトンタッチをした。

「今のトップは1-5か、俺らは逆転出来るのか？」

続いての競技は男子が一輪車で、女子が飴食改め拷問。この障害物リレーは波乱とかそんな部類じゃなくてタイダルウェーブくらい荒れている。

一輪車は小さい頃練習したけれど乗れなかったと言つ人が多いだろうけど、実際に俺のクラスでもそんな人が多かった。

練習の段階で普通に乗ってみても飛び込みの水泳選手のようにコ

ケてしまつて終わりと言う状況が勃発したのである。

この一輪車だけど、先程アナウンスで『乗れない人は逆立ちで100m歩くのもOKとします』だつて。

「身の回りに一輪車に乗れる人いた？」

「わたしは中学校の時にいたわよ、一人だけ」

「やっぱり乗れる人っているんだな、俺は一度も見たこと無いよ」

中学校の時にサーカスの中継をテレビでやっていてピエロの人がジャグリングしながら一輪車に乗っていたのは覚えている。

その時に軽々と一輪車を乗りこなすピエロを俺はガラパゴス諸島に生息している絶滅危惧種みたいな目で見ていたのも覚えている。

しかし今、男子らが苦勞して乗っているのを俺らは爆笑しながら見ているのだが。

「一輪車つて中々乗れるようになるの難しいんだよね？」

「そつだよ、バランスとか必要だし」

「璃桜は乗れるのか？」

「幼稚園の時は乗っていたけど、もう乗れなくなつちやつた」

そんな談話をしている中、一輪車に遊ばれている男子らは30mほど進んだ所でそのままコンクリートのトラックにダイブしてしまつたり逆立ちを始めたりしている。

観客席を見てみると腹筋が裂けるほど笑っている二、三年生の皆様と見るに耐えないと言いたそうに背を向けている数十人。

コケたせいで流血シーンも含まれてR・18指定を受けてもおかしくないほどのリレーになってきているが、この障害物リレーは未だに続く。

「競技の中断とか無いのか？」

「いや、特に無いって言うてたけど」

「どうせ終わるのが早いからコレで時間稼ぎでもしているんだろうか？」

「うん、生徒会の人もそんな感じの素振りを見せていた」

ドSの集まりのくせに計算高いな生徒会。内部から学校を潰す為に戦略を考えるのが得意な輩を雇ってこつやって投げやりな体育祭でも行ってるんだろうか？

二分くらい経ってからようやく一人の男子が1000m一輪車で走り終えたのである。

しかしまあ、10点満点を貰えるようなダイブをトラックに決めた男子だったので、その時に負傷して出て来た鼻血に悶えていた。

一つ俺が言えることと言えば、第三走じゃなくて良かった。

その後のパン食い競争だが、流血に悶える男子どもは海老の背中を180°曲げたかのようなジャンプを披露したり手を使いそうになったりと再び悶絶している。

「ようやく女子にバトンタッチか」

「次私達だよ、用意しないと」

俺らはトラックに出てから第三走女子の走りを見物することにする。

さて、拷問の時間だ。……いや別に俺は拷問を行う牢獄の番人とかそんなのじゃなくて、適当に言ってみただけだ。

ただしこの飴食いこと拷問は可愛い女子を可愛くなく見せると言う恐ろしい錯覚を起こすのだ。

案の定バトンタッチをしてしまった女子達は知恵の樹に生えた果実を食べるかどうか迷っているイヴのように飴食いを行うかどうか躊躇っている。

結局は競技の進行を考えて行う訳なんだけど。

この飴食いは言い忘れていたが、ダミーのマシユマロも入っているから完璧に飴を当てるまで先には進めないのである。

勿論、当てなかったら反則負け。女子の生徒会の人が検証するんだってさ。

「もう俺らがダメだったらアレだな、此処の反則に賭けようぜ」
「そうね」

何て笑っているうちに1・2かどこかのクラスが飴を当てたつばくてバトンを持って走り出した。うわぁ、顔は雪にも引けを取らないくらい真っ白。

その後、その他のニクラスも飴を当てたのか走り出した。

しかしその顔は真っ白にも真っ赤にもなっていて莓大福を彷彿とさせる色をしている。

何か恥辱のあまり、走りながら泣いている女子もいたりとか、下

を向いて走っている女子とかいたりもしている。

『見ないで下さい!』とか『もう私お嫁に行けない!』とか叫んでいる。

「さて、バトンが回ってきたか」

涙目になっている女子からバトンが渡されたので俺と璃桜は目の前にあるテーブルへ手をかけた。

璃桜は体操服の上から服を着れば良いだけなのだが、俺は炭酸を完璧に飲みきる必要があるので放送禁止の状況にならないことだけを願う。

「頑張つてね、光輔君」

「おう、璃桜も早く着替えるよ」

先程の借り物競走で買ってきたと思われるコーラ500mlを手にとつて、俺はフリースローを打とうとしているバスケの選手のような表情を浮かべた。

振つて炭酸抜きたいんだけど、それをすれば反則になるとのこと。しかもペットボトルから溢れ出たら予備を出されるんだって。

覚悟を決めた俺はグツとコーラを口に含んだ。

この時点で炭酸が口の中で俺の皮膚へとアク×リオンばりの無限のパンチをお見舞いしている。

そのまま喉へと押し込んでいくんだけど、喉にも炭酸はパンチをしながら進んでいき、俺の口の中がスパークリングしてやがる。

確か一気飲みだから一度口を離したらアウトだった気がするぞ。
畜生、生徒会の奴らはどんなサディスティックな楽しみ方をしているんだ。A×Bよりも酷いことさせられているんじゃないの。
と考えていると1-5が飲み終わったっぽい。

『おっと、1-5が飲み終わったようです』

稀にアップされている腹の立つニコ×コ動画の実況くらいウザいアナウンスが聞こえてきた。

喉が限界に達したところで500mlのコーラがなくなり、黒色の呪縛から俺は解放されたのだが、今の気持ちを言つと、とにかく喉がヤバイ。

「喉がっ！ 喉があっ！ 喉があああっ！」

正しくは『目がっ！ 目があっ！ 目があああっ！』だが、そんなのどうでも良い。喉が腫れたなど涙目になっていると、璃桜の方が着替えを済ませたっぽい。

しかし今の俺は再起不能。再起するまでには喉の腫れを治す為の何かが必要だ。

「光輔君、あとちょっと頑張ろう、ゴールはあと少しだから」
「……あ、ああ」

声にならない声で言う俺は璃桜を見た。

……ただ、その格好が何故かメイドさんなのは気のせいなのだろうか？ 俺は炭酸の水圧に制されて脳をハイジャックされてしまったのだろうか？

それとも此処は天国なのか？

立ち上がってみれば他のクラスの女子二人は巫女さんと何処かのアイドルと化していた。

もう早着替えとかじゃなくて……コスプレ、だよな？ 誰の趣向？

「さて、行こうか」

二人三脚の紐をグツと結んで歩き出す俺たち。

観客席をチラッと見てみると凄いオーラが業火のように出ているのが分かるのだが、それが男子と一部の女子から出ているのだ。

この嫉妬のオーラは何処かの悪霊の怨念のように強いモノを持っているのも見て分かる上に、何かの祟りを引き起こすに違いないと言うのも分かる。

しかし観客視点だと俺とメイドさんが二人三脚しているってどんなシニールな光景だよ。

何処のメイド喫茶に行っても受けられないサービスじゃないんだから。

「前にもうークラスいるけど、璃桜、勝ちたいよな？」

「うん、負けるのは嫌」

と、こちら辺の話はアニメみたいな映像の方が解りやすいけど文章化すると分かり難いと言うことで申し訳ありませんが結論だけ話させて頂こう。

1 - 2、1 - 5、1 - 6の三クラスとも競っていたけどもほぼ同時にゴール。

生徒会の人がどのクラスが優勝なのか決められないのか、周りの生徒会の人に助けを呼んでいる。

『三クラスがゴールしました』

このリレーだけど、どのクラスが優勝してもおかしくないような状況に置かれている。

生徒会の人たちは企業が新しい商品のデザインの考案を話し合っているかのように、優勝クラスがどのクラスなのかを話し合っていた。

が、それも終わったようであナウンスが入ってきた。

『優勝クラスは1 - 6です』

一応、1 - 6の席の方からは歓喜の声が聞こえていたのに俺はちょっと驚いた。

そして横では委員長はメイド様なのかとツツコミを入れたくなるような璃桜が、天使のような笑みを浮かべて勝利を喜んでいた。

第十話 恋愛において努力しない奴にチャンスは来ない

【第十話 恋愛において努力しない奴にチャンスは来ない】

現在、プログラム二番が終わってから観客席のスタンドへと戻ろうとしている所。

俺はメイド服を生徒会の人に返そうとメイドカチューシャを外している璃桜を、勝利の女神に勝ちを乞う時のような目で見ていた。哀しいのだが璃桜のメイド姿を見るのはこれで初めて最後か。

「さてと、スタンドに戻ろう」

「そうだな」

俺は未だに痛みを引きずっている喉の奥からいつも通りの声を捻り出して答えた。炭酸がこれほど痛さを持っているとは思わなかったぞ。

決心したよ、俺が生徒会に入ったら全世界の生物を敵にしても今日のような障害物リレーを翔鳳高校体育祭のプログラムから抹消してやると。

でも生徒会入るつもり無いけどな。

ただ、この障害物リレーに感謝すべきことは璃桜のメイド服姿を拜めたことだな。

これが無かったので有れば俺は生徒会にテロを起こしていたかも

しない。

「勝っちゃったね、なんだかんだで」

「まあな」

本当になんだかんだと言うべきだな。

「途中結果は昼休みに発表だっけ？」

「そうらしいな」

毎年のごとらしいが勝利なんて三年生が根刮ぎ持って行ってしま
うんだから別に俺は構わないけど、ちょっとくらいは勝ちたいので
気になる。

生徒会の待機室で点数は嚴重にセキュリティされているので俺ら
みたいな奴がネズミ小僧よろしく生徒会の待機室へ行くことも見る
ことはできないのだ。

「他の競技でも見ようか、楽しみだね」

「特に見物なのは午後の部だっけ？」

「そうだよ、でも午前の部も結構面白いのあるらしいよ」

いや、それはさっきの俺たちが出た、社会的抹殺を可能にする
言っても過言では無いような史上最悪のリレーのことだぞ。

午前のプログラムと言えばほとんどはリレーである。

他のと言えは縄引きとか騎馬戦とかくらいしかないぞ。

まあ騎馬戦は色々と白熱しそうなんだけど、縄引きとか見ていて地味〜なだけじゃねえの？

「取り敢えずスタンド戻ろうよ」

「そうするか」

とか言いつつも俺らは1 - 6の応援席に戻ってきた。

祝福ムードは感じられるんだけど、左側に固まっている男子の大半からは殺気や嫉妬を材料としたどす黒いオーラが感じられるぞ。

昼休みの展開が三流のドラマくらいまる分かりなんだけど。

「お疲れ様、あの障害物リレーは大変だったよね」

「俺たちに優勝を有り難う！」

「賽は投げられたー！」

何か感謝の言葉の中でアホらしい言葉をほざいている人が居るのは気にするな。きっとこれからの勝負もこの調子で戦おうってことだろ。

俺は次の競技でも見ようかと応援席に腰をかけた。

隣には中学校から仲の良かった友達の城崎がいるので孤立はしなくて良いのだが、まあそういう関係のトークにならないことを願っておこうか。

「障害物リレーってあんなことするんだな、俺初めて見たよ」

「先輩から俺は聞いてたぞ？」

「へえ、出ようかと思っただけで出なくて良かったな」

他人事みたいに流すなんて畜生、羨ましいぞ。

俺なんて喉に大ダメージを負って帰ってきただけだからな。何か楽しそうって言うノリがこんな事態を巻き起こすなんて鯛で海老を釣る感じだよ。

騎馬戦とかにしておけば良かった。

「今ハードルリレーやってるけど、結構面白いよ」

「ぶっちゃけ佑斗は何処が面白いと思う？」

「いや、ジャンプとか」

取り敢えず言っておこう、佑斗って言うのは城崎の名前である。

それにしてもハードルを跳ぶときのジャンプは綺麗な人とそうでない人のジャンプの出来具合が全然違うのである。

綺麗な人は本当に世界陸上で見るようなジャンプなんだけど、汚い人と言えばマ×オジャンプばりのジャンプかそれ以下のジャンプをしている。

ハードルにあたってコケるような輩はいないものか。

当たると物凄く痛んだよね、陸上部の潤平から聞いたんだけど凄く痛いらしいぞ。

「四番目のプログラムって何？」
「騎馬戦だったかな？」

いきなり騎馬戦だったよ。

「まあゆっくり観戦しようよ」
「そうするか」

午前の部で出るような競技はもう無いので俺はぼんやりと見ることにした。

*

『では、これから昼休みとします。中間順位の発表は第一ゲートの前で行います』

途中結果は放送で知らせるんじゃないなくて開示するんだな。

「光輔君、途中結果見に行こうよ」
「ちよっと待って、何か飲むもの買ってくるから」
「良いよ、早めにお願いな」

俺は席を立って近くの自販機へと歩いていった。

実際、先生から自販機の使用はNG出てるんだけど皆にそんなことを言うのはナルシストの耳に『キモイ』の言葉を浴びせるのと一緒に、皆は普通に自販機使っているのだ。

しかも今スタンドで女子とか携帯使っているしなあ。

とにかく先生がいないからって皆が皆、羽を伸ばしすぎて居る。

先生がいないからそんなことやっちゃって良いんですかって言いたいけど、俺もその一人。

まあ終わりよければ全て良いんだよ。

「ターゲット見つめました」

「よし、急所を狙え」

と言う声が聞こえて来た。……どう考えても、狙われているのは俺だよな？

本当に最近物騒なんだよね、色々恐ろしい事件もあるんだしなあ。俺も翌日の朝にめ×ましテレビとかで『翔鳳高校一年水村君が……』とか報道されないようにしないと。

なんて言っている暇はねえ！

「お前らまた俺を狙いに来たのか！」

「いかにも」

「そんなに璃桜のことが好きか！ どのストーカーだよ！」

「その為に貴様を殺ろうとしているのだよ？」

「まず努力しろ！ 俺から奪い取るとかそう言う努力を重ねろや！」

背後を振り向いてみると2、3人だろうと思っていたけど何か……
…凄くいるんだよね、アリの行列と同じくらいの男子が。
どうせ一年だろうから気にしないけど。

「俺たちは『忌々しき水村を討つ組織』だ！」

「ネーミングセンス悪いぞ!？」

「分かりやすい方が良いだろ！ ネーミングセンスがなんぼのもんじゃない!！」

「正論だ！ 何気なく正論だ!！」

俺一人に対して百人くらいの男子と漫才みたいなやり取りをしているのは気のせいと言うことにしておいて欲しい。こんな奴らと漫才したくないし。

別に好きで璃桜と付き合っても無いのに、忌々しいと言われる筋合いは無い。

「付き合ってるのは事実だろうが!！」

「それは認めてるぞ!？」

「じゃあ我らの女神の璃桜様を帰さんかい!！」

「璃桜が何時の間にお前らの物になっているんだよ！ と言うか努力しろ、お前ら」

こんな奴らとこんなシニールなやり取りをする俺が恥ずかしい。

「それをしてそんな機会無いのはどういうことだ！」
「お前らの押しが足りないんだよ、もっと押してみたらどうだ！」
「でも璃桜様は振り向いてくれないんだけど!？」
「無理な時は無理だよ、諦めろ」

本当に璃桜を俺から取り返そうとしているっぽいけど、どうせ無理なのは分かってる。仮に取り返しても結果は見えているよ。
俺の昼休みはコイツらとのやり取りで半分が潰されるだろうね。
全く、勘弁して欲しいぜ。

第十一話 人間は本能で恋をする

【第十一話 人間は本能で恋をする】

目の前には100人以上のおぞましき敵、俗に雑魚敵と呼ばれても可笑しくない璃桜を追いかけ回すストーカー軍団が石像よろしく立っている。

コイツらは璃桜に俺という人がいると知っているのに未だに狙ってくると言う、ストーカー規制法も良いところであるバカ軍団なのだ。

どうせ裏の方では『我らの辞書に不可能と言う文字はない!』とナポレオンのようなことでもほざいているのだろう。

この状況を早く切り抜きたいものだ、腹減っているしジュースが冷たくなるし。

「お前らは他の女子を好きになったりしねえのか？」

「いきなり何を聞くんだ？」

「とんでもねえストーカー軍団だけだし、お前らの中にはイケメンもいるんだから、多少は好きって言うてくれる女子もいるだろ？」

俺のクラスでも何人ほどかはイケメンがいるんだけど、ソイツらは璃桜と言う名の幸せの白い粉に近い物に依存してしまいストーカーと化した訳。

あ、因みに幸せの白い粉なんてダメ。ゼツタイ。取り敢えず言うておこうか。

そんな奴らも中学校に少なからずモテていたらしく、彼女がいたりもしたらしい。

ただ、今はこんな有様だけだな。

「どう思う?」

「そうか、それを考えたことは無かった!」

「根本的にダメ人間かお前ら!」

開き直った訳ではあるまい。石像よろしく立っているバカ軍団は呆気に取りられた様子で猫の首に鈴を付ける方法を話し合うネズミのように話し合っている。

コイツらの頭の為に、もし良ければ今度俺の行きつけの病院の脳外科を紹介してやろう。あの脳外科の先生は賢い大学の医学部を出ているからな。

何かダメに効く薬でも処方してくれるんじゃないかな。

「一つ教えておこうか、人間諦めも大切だぜ?」

「恋してしまったら諦めも何も無いだろうが、分かってるのか!?」

「恋愛なんて諦めてこそだと思っただが?」

何だよこの青春ドラマ。俺の言っていることなんてそっくりそのまんま青春ドラマに出てくる先生か誰かの言葉じゃねえかよ。

コイツらの璃桜に対する気持ちは正しく難攻不落の砦である。ど

うにかしてバツキバキに崩す方法は無いのだろうか。
と、悩んでいると地獄に迷い込んできた墮天使が。

「光輔君、何してるの？」

俺の前にいるヤツらにとっては天使だけど、俺にとっては疫病神
と言う存在である璃桜を今は墮天使と呼ばせて貰おうか。

しかしこの状況は追試と全国模試がやってきた状況よりも精神的
に追い込まれる状況だ。

……まさか、ストーカー軍団はストライキを起こす労働者のよう
に、俺に激昂してくるんじゃないのか？

「今こそ……我らの神様が見えたんだ……取り戻す時は来た！」

「おーっ！」

革命を起こすレジスタンスの如く一致団結しやがったぞ！俺は
絶対王政をしていた訳でも無いのにギロチンで首を切られるのか！？
いや、それよりも俺はコイツらに一泡吹かせられる必殺技を思い
ついた。

「おい璃桜、急いでこっち来てくれないか？」

「あっ、うん……」

状況が把握できていない璃桜。十分間も正座した後には歩こうとす

る人のような歩き方で俺の元へと歩いてきた。

目の前では蛇睨みにも引けを取らない視線を送ってくるストーカ
ー軍団がいるのだが、璃桜がいる時点で俺に手を出せる訳がない。
この場において璃桜は俺の A・T・フィードとなってくれてい
る訳だ。

「オイ、ストーカー軍団、よく聞けや」

うーわ、蛇睨みが何かグレードアップして来た。アイツらの目か
ら体を貫通しないレーザー光線を放たれているようだ。

そんな中、俺は璃桜の肩を抱きながら、俺の顔を璃桜の顔へと近
づけて、

「璃桜は俺の女だ、断じて貴様らには渡さんからな」

どや顔と言うに相応しい、勝ち誇った顔をして言っただ。

目の前のストーカー軍団は一瞬氷結したかのように固まって、そ
のまま倒れる者やら泡を吹いて失神する者、立ったまま固まってい
る者へと変身した。

はい、これで一件落着。

「さて、ありがとう璃桜、行こうか」

「……」

見れば璃桜はリンゴのように顔を真っ赤にして茫然と立ち尽くしている。何かショックなことでもあったんだろうか。
目の前の失神した軍団を見て啞然としているのだろうか、それは分からない。

「行くぞ？ 大丈夫か、璃桜？」

「えっ！？ あ……うん、ごめんね」

「何処で飯でも食う？」

「そうだね……皆に見つからない所が良いかな……」

喋り方も覚束無くなっていたし、璃桜は心にポツカリと穴が開いたような気分をしていたのだからうけど、今はその理由を知る由も無かった。

*

『では、運動会午後の部をスタートします、次の種目の男女混合リレーに参加する選手はゲートへ集合して下さい』

現在の種目は大縄跳び。クラスの半分が参加する種目なのだが、男女混合リレーに出さされた俺は呆気なく諦めることとなった。

こちらもクラスの奴らの計画によって璃桜と一緒に。どうせ実行を企てたヤツは『計画通り！』だなんて叫んでいるんだろ。

このリレーは全学年全クラスと勝負すると言う一大リレーで、各学年での予選と決勝に分けられていて優勝への大逆転にも繋がる種目。

さらに運動会の中では一番の見物となる競技で、最強の三年生組と中堅の二年生組とダークホースの一年生組の勝負は白熱した戦いとなるのである。

「さてと、誰が出るんだっけ？」

「俺と委員長と、あと一人はまだ来てないな」

あと一人はそれなりに足が速いと言う噂の人。陸上部に所属していて、中学校の時はソフトボール部とかで県選抜のメンバーだったとか。

確か、名前は高篠さんだっけ？ うん、そんな名前。バリバリのスポーツ系だつて。聞いた話、悠里の先輩にあたる人だつて。

身体能力の高さ故体力テストはオール10と言う最強の成績。

「お待たせ、ごめんね、待ったー？」

「あ、来た来た、高篠さん」

短く切られた髪に、本当に若干だけ日に焼けた肌。いかにも体操服の似合うその女子こそが高篠さんだったのである。

さて、決勝へと出る為の作戦会議へ。

「取り敢えず奇数の走者は女子だから、まずは高篠さんに差をつけて貰うか」

「オツケー、分かった」

「それで光輔が走れば丁度良いかな」

「璃桜が走って、お前がぶつちぎって走って終わり、って訳だな？」
「そう言うことだな」

潤平は陸上部なだけあって結構速い。翔鳳高校において最速の部活は野球部と言われているのだが、野球部で一番速い奴とハリの速さである。

璃桜も意外と速いらしく、中学校の時はバレー部だったとかで運動神経も良い方らしい。

まあ悪くは無いチームみたいだが、問題があるとすれば俺。結構速い奴らの中で一番遅いのが俺である上に高校では部活と言う部活に入っていないのだ。

中学校の時はバスケット部だったから意外と速かったんだが、このチームのイレギュラー因子は俺と言うべきだろうか。

「予選はブロックごとの一位が決勝に行ける筈だから、まずは予選通過だな」

「私達なら勝てる筈」

何か燃え上がってきているのだが、熱血さがハイに達して、潤平が『もつと熱くなれよ！』とか言い出さないことを俺は願っておこうか。

俺と璃桜は乗り気では無かったのだが、さっきから璃桜は俺を見

ては顔をリンゴのように赤くしている。

さて、全クラスの全面戦争とも言っべき男女混合リレー、スター
ト。

第十二話 無茶なことすると仇になるぞ

【第十二話 無茶なことすると仇になるぞ】

『ルール説明、このリレーは各学年二つのブロックで戦いブロックの一位が決勝へ行けます』

放送部のアルトボイスがマイクを伝わって放送されてくる。

各学年、二つのブロックに別れて戦いその一位が決勝で総当たりって訳だな。各ブロックでは不平が内容に平均的な速さで分けられていると言う。

一人200m走るらしく、極端に速い奴が居た方が勝ちやすいらしい。得意な教科があれば勝てる大学入試の二次試験とメカニズムは一緒だと思ってくれ。

「さて、第一走は私ね」

「頼むぜ、大和撫子」

大和撫子こと高篠さんは足首をぐるぐる回しながら俺らの走るレーンへと向かっていった。あんな華奢な体をしているのに俊足だなんて想像もできないギャップだ。

悠里のいるソフトボール部ではかつてセンターを守っていたらしく、守備範囲は外野全範囲と言っても過言ではないチート選手だっ

たらしい。

そんな選手は野球選手の育成ゲームでもチートで出せないぞ。

『では此処で、電子掲示板に何レーンでどのクラスが走るかを表示します』

電子掲示板では即座に画面が変わっていた。

まずは一年生の走る番だからか、一年の観客席が国民的アイドルを目にしたかの如く、歓声と興奮で沸き立っていた。

いやぁ緊張するね、インターハイのリレーもこんな感じなんだろうか。

「じゃあ光輔、取り敢えずイージーミスはしないようにな」

「分かってらあ、これでも中学校の時は運動会の選抜リレーに出たんだぜ？」

この年になってリレーさえも分からないと言う奴は記憶喪失かよほど保体が嫌いで保体の時間になれば気絶ばかりしてたって言うような奴だけだろう。

そんな奴がいればまずはハンマーを持ってきて頭をブツ叩いてやるけど。無くしてしまった記憶を取り戻させてやろう。

『ではリレーの準備が出来たようなのでスタートしたいと思います』

勝負を告げるピストルを構えて朝礼台に立っている生徒会役員に一瞬目を移し、俺は高篠さんへと目を追いやった。

……高篠さんの目がマジになっている。断食を終えて獲物を目の前にしたライオンみたいだ。

『よーい、スタートっ！』

ピストルの音が空へと劈くと観客席からは興奮を隠せずに歓声が上がらだし、レーンの上に立つ四人の女子がスタートを切った。

四人の中で一番速いのはやはり高篠さんだった。二次関数のように高篠さんの速さの二乗は進む距離に比例して、どんどんと加速。

他の女子とは圧倒的な差を付け、勝ち誇った王者の顔で走っていた。

俺は、この大差があれば安心して走れると安堵した。

もうちょっとでバトンパスだな、と俺は走る準備をしようとしたのだが、

「バトンパスするから水村君、走って！ 速く！」

ちょっと待って下さい、まだ30mくらい俺と高篠さんには距離がありますよ？ 速すぎませんか？

と言う疑問を浮かべていたんだけど、彼女の洞察力に狂いは無かった。

走り出した俺は前へ前へと進んでいき、テイクオーバーゾーンを超えそうになったギリギリの所で丁度バトンパス完了。

「これも高篠さんの速さがあってこそ成り立った荒技なんだろう。」

「よし、俺はこの差をうまく使って走るだけか」

リレーは一瞬の気のゆるみが勝敗へと繋がるらしいから気は抜かずに行こう。

流れは順調で、そのままバトンパスまで行けば良いんだけど、次の走者は璃桜だった。

此処で問題が発生。

「璃桜、バトンパス行くぞ、走れ」

「ほえっ!?!」

素で驚いた表情の璃桜。鳩が豆鉄砲じゃなくて輪ゴムを発射されたような表情を浮かべてこっちに気付いた。顔を真っ赤にしたままで。

スタートが遅れたこの状況で俺は嫌な予感を察知していた。

さて、俺と璃桜の距離が縮まってきて、いよいよバトンパス……と言ったところなのだが。

不覚にバトンを落としてしまった。

「あっ……!!」

「ヤバい、追いつかれる!」

咄嗟に声を上げる俺と璃桜。後ろを見ると二位を走っている奴らがホラー映画で主人公を追いかけけるゾンビのように走ってきてバトンパスへと段階を踏んでいた。

慌てながらもバトンを拾った璃桜は、皿を割ってしまったドジっ娘メイドのような顔をしながらも全力、いやそれ以上の力で走っていた。

あれ、結構一位と二位の差が僅差になってきたな。

『おっと、一位の1 - 6がバトンを落とすと言うハプニングにより二位と接戦です』

ちょっと実況黙ってる。璃桜の気分をこれ以上害するなら俺が許さんぞ。

必死で走っている璃桜だけど、やっぱり相当ダメージを負ったのかどうか分からないが二位を走っていたクラスに抜かれてしまった。前を走る女子は何の勝負に勝ったのか分からないが何かに勝ったと言いたそうな、どや顔だった。

「心配はない、こんな時に強いのが潤平だからな」

ぼそつと呟きながら、俺は勝敗を見届けることにした。

一位のクラスがバトンパスをしてから、ちょっと遅れて璃桜と潤平がバトンパス。

さてさて、ここからはアンカー対決。

「後は俺に任せとけっ！」

格好良くバトンを受け取った潤平は二、三回地面を蹴るかのよう
なステップをすると文字通りロケットスタートを繰り出した。

疾風の如く加速していく潤平のその姿は正しく、光のようでウサ
イン・ボルトを彷彿とさせる走りをしていたのである。

今日の行進の時に俺に学級旗を持たせたのは許しておこう。

一位と二位の差は逃げるウサギとそれを追いかけるライオンのよ
うに詰められていき、潤平は余裕そうな走り第一位のクラスを追い
抜いたのであった。

さて、このまま逃げ切れれば俺らの勝ち。

「流石はアイツだな、陸上部のエースだ」

残り50m、潤平は余裕そうな走りを見せて走りきって天空へと
ガッツポーズをしながらゴールテープを切ったのである。

これで俺たちは決勝進出確定となった。だが……。

「……光輔」

「どうしたんだよ」

「足、ロケットスタートでちょっと痛めちゃったみたいだから、お
前アンカー走ってくれない？」

「はぁ!？」

大問題が発生したのであった。

俺がアンカーを走るだなんて砂漠を飲み水なしで歩くと言う自殺行為に等しい。……やっぱドイツは許せねえ、と俺は思っていた。

第十三話 奇跡なんて努力する奴が起こせるものだ

【第十三話 奇跡なんて努力する奴が起こせるものだ】

『一年生Aブロックの決勝進出は1 - 6です、Bブロックのクラスは準備して下さい』

退場しながら流れるアナウンスを聞いていて嬉しいのだが、俺は憤慨の気持ちも覚えた。チヨコレートの中に唐辛子を入れられた気分だ。

俺の横で痛そうにしているダメな男子委員長のおかげでな。

「本当ゴメンな、決勝は取り敢えずアンカー頼んだから」

「お前……アンカーって凄く大切なポジションじゃねえのかよ？」

「いやいや、俺もケガはしてるけど差は開けてくるからさ」

反省の色が全く見えないダメ野郎だ。ところで、反省の色ってどんな色なんだろう？ 俺は小さい頃に母親に聞いたことがあるのだが、返答は言うまでもない。

俺がもし將軍だったりしたのならば、こいつは無入島か何処かへ島流しにでもしているだろう。それか切腹を命じているか。

「まあ決勝に備えてテーピングでもしてくるから」
「おーおー、勝手にどーぞ」

救護室へと向かうダメ野郎を軽くあしらってから俺は憤慨する気持を何処にぶつければ良いんだろうと悩んだ。

ただしアイツのおかげもあって今回決勝に進出できたんだから、その点は感謝すべき点なのかもしれない。

そして、俺にはリレーの中での反省では心当たりがもう一つ。

あのミスをしてしまった璃桜はどうなっているのだろうか。俺はそれを聞きに璃桜の元へと向かうこととした。

と言っても直ぐ近くにいるんだけどな。

「璃桜、リレーのこと気にしていないか？」

「……うん」

「ちょっと聞きたいことがある、こっちに来てくれ」

枯れそうになっている花のような表情をしている璃桜は俺に目を合わせようとはしなかった。申し訳ない気持ちでいっぱいなのかどうかは知らない。

しかし俺は一つ、謝らなくては行けないことがある。

「あのミスの原因は……俺だ」

「えっ？」

「顔が真っ赤だから分かったよ、お前は昼休みのあの一件で俺を見る度恥ずかしい気持ちになっていたんだろ？」

「……そう、あんなこと言われたの初めてだったから」

普通に無理もない話だろうよ。

璃桜にとつては俺は『奴隷兼彼氏』ではあるが、俺はあの時、完璧に璃桜のことを『俺の女』と言ってしまった。

普段の学校生活においてパシリの仕事をさせている俺にそんなこと言われてみれば、そんな気持ちになるのもおかしい訳がない筈だ。

あの場を切り抜ける為と云えど、突然あんなストーカー軍団の前で言われてみると恥ずかしいを通り越した何かを覚えるだろう。

「それについては謝罪する、ゴメン」

「もうこの件については構わないけど……同じような過ちは犯したくない」

「決勝は俺がアンカーだから、俺にしっかりバトンパスをしてくれ」

「……うん、分かった」

恥ずかしいんだろうか、未だに目が合わせられない璃桜。

「……何なんだろうな、この気分は」

横で、璃桜がぼそつと呟いているのが聞こえたのだが、その言葉が何を暗示しているかは、今はまだ分からなかった。

さて場所は変わり今は予選を観客席で見ているのだが、やはり二年生ともなると俺らとは別格の走りをしている気がする。一言で言うとな全員が安定して速い。

俺らは二人が速くて二人が普通と言った所だが、二年生は全員が安定していてその中で速い先輩たちがいると言つに等しい。

さらに野球部ともなれば潤平ばりの速さである。

そして三年生は未知の領域と言っても過言ではない。潤平や高篠さんより速いんじゃないかと思われる先輩が十数人と言つのである。

「いや、これ、勝てると思うか？」

「でも光輔達の走りも良かったよ、結構競るんじゃないかな？」

「まあ……それだったら良いんだけど……」

隣で居る佑斗は首をフクロウのように傾げたまま各ブロックの一番速いチームの分析を行っていた。一つ言えるところは、アンカーがやはり強いことだと言つ。

「勝てると思うか？」

「でも神坂君が足を痛めて二走だからね、やっぱり前半が勝負の鍵かな」

何とも正論だ。と、そんなこんなでリレーの予選が終了し、決勝の前の前菜として玉入れが行われる時間となった。ちなみにこの玉入れはカゴを持った生徒会の人走り、そのカゴに玉を入れると言うドM・ドSの人にはたまらない競技なのである。ただし出れるのは女子限定だが。

『では男女混合リレー決勝に出るクラスは第一ゲートに集まって下さい』

招集だ。では行ってくるでしょう。

アンカーと言う一番荷の重い仕事を背負って。

*

『男女混合リレー決勝、一レーン1・6、二レーン……』

一レーンは再び俺ら。トラックの配置も本格的で学年のことも考えて一・二レーンは一年生となっているのである。

高篠さんの目を見てみると再び燃えている。今度の目は自分よりも強い獲物を探し求めて、ようやく見つけた戦いに飢える世界最強の人みたいな目をしている。

そして半ズボンの下を見ると膝あたりにテーピングを巻いているダメ野郎の目もエヴァン×リオン初号機に乗った時の某パイロットと同じような目だった。

何だかんだ言ってあのダメ野郎も本気だな、と俺は改めて実感した。

『よい、スタートっ！』

お決まりのピストル音が鳴り響く。それと同時に走り出した六クラス代表の一走。

その中でも一番に飛び出したのは高篠さんだった。が、予選の時とは状況が違い後ろから他の五人が獲物を仕留めようとするチーターのように走ってきている。

流石の高篠さんにもちよっと焦りが出ていた。

そのまま順位と走者間の差は停滞していて、第二走者へとバトンタッチ。

第二走者はそこまで速い人を置いていないのか、あのダメ野郎は再び差をこじ開けようとするかのように独走を始めた。

「……さて、次は璃桜か。一走が速かったから三走はそうでも無いかもな」

ダメ野郎改め潤平は先程からダメ野郎と呼ばれている分を取り戻す働きをしてから璃桜へとバトンタッチした。璃桜も死ぬ気で走っ

ているだろう。

首位独占で走っていたが、そう言う訳にも行かず三年生の中でも最強と言われるクラスが一位へ躍り出ようとしていた。

が、璃桜はどうか逃げ切り、俺へのバトンパスへと移ろうとしている。

ただし、此处であの過ちをする訳には行かない。璃桜は俺の顔を見れないのか俯いてチーターから必死で逃げる小動物のように走っていた。

「璃桜、来い！ 心配するな、俺を見てバトンを渡すんだ」
「……！」

俯いていた璃桜だが、俺の声に反応したのか意気揚々とした顔で俺を見てバトンを力強く渡した。

さてと、後は俺が逃げ切るのみ……と思っていると、

「決勝はアンカーは特別ルールによりトラックを一周走って貰います」
「そんなルール聞いてねええええっ！」

いや、聞いてないんじゃない、俺がプログラムに載っているルールを見るのを忘れていただけだ。トラック一周は400m。そうともなれば体力勝負でもある。

ケガを引きずって200m走るなんて造作も無かった筈の潤平がアンカーを降りたのはこのせいか。400mもケガと言う爆弾かか

えて走つてたら爆発するだろうよ。

100mくらいを走った所で体力がちよっとヤバくなってきた。しかも後ろから来るのは潤平くらいの速さで走ってくる三年生。

まだまだ距離があると言っても何れは詰められるだろう。

と、一瞬諦めかけたその時だった。

「水村ー！ 諦めるなー！」

「頑張れー！ 優勝をつかみ取ろうぜ！」

「一年坊のくせに頑張っているじゃねえか！ 奇跡を見せてくれ！」

と、声援が聞こえてきた。見れば観客席の所を走っているのである。これほど声援を暖かいものだと感じた瞬間は15年間の中で無かっただろう。

周りの化け物に比べれば俺は確かに一番人間적かもしれない。でも、そこからの下克上と言つのもあるかもしれないだろう？

面白えな、見せてやるうじゃねえの、奇跡とやらを。

俺は限界、いやそれ以上を超えた所までの力を出した。エネルギーの使いすぎでぶっ倒れても良いと決意した。もう一度、とある奴の笑顔も見たいからな。

「光輔君、頑張つてー！」

色んな声援が飛び交う中で聞き覚えのある声。璃桜の声である。勝つんだ、と決意した俺は本気で走った。何の為なんだらうと聞

かれるが、そんなのに理由は無い。まあ厳密に言つと有るんだけど。

体力も僅かになってきたが、ゴールテープが見えてきた。が、後ろから走ってくる三年生に俺は気付かなかった。気付いたのはゴール直前になってからだだったのである。

微妙な差でゴールをした俺と三年生。勿論勝敗は実況か生徒会の人で判断だろう。

『今のゴールは1 - 6が先でした、よって優勝は1 - 6です』

障害物リレーも同じような感じだったかもしれないのだが、俺は数秒前に奇跡を起こした。見たかよ、俺の雄志を。

観客席から起こる今までに聞いたこともないような歓声を聞きつつ、奇跡を起こしたことを喜びながら俺の意識はブラックアウトした。

第十四話 部活動対抗でリレーすると大体勝つのは野球部か陸上部

【第十四話 部活動対抗でリレーすると大体勝つのは野球部か陸上部】

あれ、何でだろう、さっきまでトラックの上で歓声を受けていたと言っのに今は人が周りにいないかのように静かで、目の前には何処かの天井が。

いきなり神様から超能力者に命じられてテレポートを覚えてしまったのかな。

うわぁ、足が何か動かない上に背中から下半身にかけて麻痺したみたいになってやがる。

「そうか、俺はリレーで優勝して倒れたんだっけ」

今、全てを思い出したぞ。記憶喪失の人みたいな一言だが、俺は事態が飲み込めなかっただけだ。決して記憶喪失とかでは無いからな。

しかし先生は何処かに出ているらしく、救護室は俺一人だけ。不便なこととは言っと、下半身全体が縄で縛られていたかのように筋肉痛で体が動かないことだ。

このままナイフでも持った人が来たら俺は助けを求めながら死んでいくことになるぞ。

「失礼します、水村君いますか？」

ガチャリとドアを開けながら聞こえてくる女子の声。その声には聞き覚えがあり、俺は考えるまでも無く誰が来たのかが分かった。璃桜だ。

何を話に来たんだろうか。

「お疲れ様、光輔君」

「おお、璃桜か」

「倒れた後だけど大騒ぎだったんだよ、歓声が一瞬にして止まったし」

「それは知らんな」

璃桜の話では俺は倒れた後、数十秒息をしていなかったらしく心臓マッサージをした所で息を吹き返したらしい。

歓声が止まった後、心臓マッサージ中は観客席が『帰って来ーい！』と叫んでいたそうだ。

何処のコント集団だ。

息を吹き返した後、担架で俺は救護室へと連行されていったと言
う。

もう今は部活動対抗リレーのアピール部門の真っ直中らしく、ふと耳をすますと吹奏楽部が演奏しているのが聞こえてきた。

因みにこの部活動対抗リレーは最後に行われる競技で、アピール部門とガチ勝負の部門がある。

アピール部門はリレーとは無縁の、部活動紹介に近い部門だが、ガチ部門は出る人全員が豹変したかのように目の色を変えて勝負をすると言う。

「リレー勝てて良かったなあ、優勝をつかみ取れたと思う？」

「いや、分からないけど優勝の発表は閉会式で行われるんだって」

「一つ聞きたいんだけど、先生は？」

保健の先生くらい居るはずだろう。息してなかった俺がいるんだから先生も俺をほったらかして何処かに行ってしまうだなんて見殺しも良いところだ。

璃桜が金で買収したなんて訳は無いだろう。

「私が救護室の前に来たら偶然であったんだけど、『ごゆっくり！』って言って何処かに行っちゃったのよ」

「あの先生頭でも打ったのか！？」

まず先生でさえ俺と璃桜の関係を知っているのが驚きだけど、その対応はいくらなんでも無いと思うぞ。そんな先生は保健の先生辞めちまえ。

しかし俺と璃桜で二人つきりなのはマズくないのか？ 誰かに見られたら困るぞ。

「あのね、光輔君」

「おう、どうしたんだ」

「一つだけ言いたいことがあるんだけど」

何かのフラグが立った気がするぞ。一週間前もこんな感じでフラグが立ったのを覚えているのだが。何処かのギャルゲーばりの展開だ。

もう俺は驚かないぞ。どんな展開が来てどのようなルートを歩むことになるうとも構わん。

「私と光輔君が付き合う切欠になった言葉は『私の奴隷になれ』だったよね?」

「まあそうだったよな」

思い出したくもない忌々しいミスを犯した日ではあるのだが、振り返れば俺の人生はあの日から大きく変化することとなってしまった。

あの時に女子の実行委員に残らせておけば俺は今頃普通の高校生として彼女を欲しがっていたのかもしれない。

璃桜とは無縁の人生を送っていたかも知れない。

今、よく考えてみるよ。そう言う人生と、今の人生、どっちが楽しいんだろうか、と。

それを考える暇もなく、璃桜は次の言葉を紡いだ。

「それについては謝らせて、ごめんね」

「……何で?」

「そして、その言葉を訂正する」

ちょっと待て。訂正って……まさか璃桜は俺との関係を断ち切りたいと言うのか？

ふと振り返れば、まだ知り合って間もないけれど一緒に昼飯食べた昼休みだつて波乱のゴールデンウィークだつて楽しかった。

今日の体育祭なんてストーカー軍団とかも出て来たけれど、それもちょっとした一つのスリルであつて凄く嫌とかそんなのでは無かつたと思う。

そんなのは嫌だぞ、璃桜と関係を断ち切るなんて。

でも俺が嫌なことを主張するのは、璃桜の言葉を聞いてからだ。

「私と……付き合つて下さい」

その言葉は俺の想像を絶して、頭のなかで一周してから訳が解らなくなつた。

言葉の意味からして、関係は断ち切らない筈だ。でも、璃桜の言葉は……付き合つてくれ？ これは普通に告白と取つても良いんだろつか？

驚きのあまり、雷にでも打たれたような衝撃が体を一瞬で駆け巡つた。

待て、俺、冷静になれ冷静になれ冷静に。これはきつと告白だ。

だから俺はそれを受け入れるべきなんだ、璃桜との関係を断ち切りたくないならば。

「うん、じゃあ、こちらこそ宜しく」

俺の返答はこれだけだったが、実際のところ俺の心の中ではこれで良かったんだよな、と何度も自問自答を繰り返していた。

その返答に対して璃桜は、天使のような笑顔をこちらに浮かべて。

「ありがとう、これからも宜しくね、光輔君」

*

救護室ではそのまま何をすれば良いか分からずに気まずい空気が流れていて、俺は頭が再び狂った末部活動対抗リレーのガチ部門を見ていた。

優勝は結局野球部と陸上部が争って野球部だったけどな。大抵の部活動対抗リレーなんてそんな物であると言うことは分かってるさ。

『では、閉会式を始めます、まずは優勝クラスの発表』

確か優勝クラスは男子部門と女子部門、そして総合部門での発表

をして、各学年で一人ずつMVPを表彰して終了、と言う流れで進行するらしい。

総合とまでは行かなくても、何処かの部門に入っていれば良いんだけどなあ。

『では優勝クラス、男子部門3年2組、女子部門2年5組、総合部門……』

うーわ、緊張する上に男子部門も女子部門も入っていなかったぞ。総合は多分無理なんじゃないかな、三年生は本当に気合い入っていたし、騎馬戦とかリレー以外の競技で悉く負けたし。

このまま勝てるなんてアリとゾウの勝負でアリが勝つに等しい。

『1年6組』

……ああ。勝ったんだね、勝ったのか。まさかあの崩壊しかけていた障害物リレーと男女混合リレーだけで勝てちゃうなんて。

しかも俺の近くでは喜びのシャウトが飛び交っている。この総合部門の優勝を考えるとダークホースとは俺らのことだったのかもしれない。

中には嬉しすぎて泣いている女子までいるぞ。

『では、MVPの発表をします』

前の方でクラスのプラカードを右手に持っている璃桜も泣いていることに気付いた。何故か嫌われている俺が優勝に貢献できたと思うと嬉しいなあ。

どうせ俺はMVPでは無いだろう、と思ってMVPを聞くことにしたが。

『一年生、1-6の水村君、二年生……』

あれ、幻聴が聞こえているのかなあ、俺の名前を呼ばれた気がしたんだけど。それとも耳の掃除が足りないんだろっか、今度血が出るまで耳を掃除しようっと。

もし本当に幻聴であるとすれば俺は耳鼻科に5回以上通っても構わないぞ。やっぱりリレーで無茶したのが響いているのかな。

『では、今呼ばれたクラスの代表者とMVPの人は前へどうぞ』

「水村君、行ってきなよ、名前呼ばれたでしょ？」

「……呼ばれてたの？」

「そうだよ、水村君はリレーの決勝でヒーローになったからね」

幻聴では無かったみたいだ。行ってくるとしようか。

「おう、MVPおめでとっ、ヒーローさんよ」

「俺はぶっちゃけお前か高篠さんがMVPだと思っていたぞ？」

「いや、俺は所詮足を怪我したにすぎないからな」

「よく分かってるじゃねえの」

表彰をしている校長には聞こえないように小さい声で話をする俺と潤平。

今考えてみれば、こうやって前に立てていることが嬉しくて心臓がいきなり止まってもおかしく無いかもしれない。

「表彰、総合部門1年6組……」

1 - 6の表彰も終わり、その後の表彰に関しては省略するが、かくして表彰は終了。

開会式の短い話とは違う、長々しい校長の話を聞き流してから俺たちは最後の放送が流れてくるのを余韻に浸りながら聞くこととなった。

『以上で、体育祭ならびに閉会式を終わります』

翔鳳高校体育祭、これにて終了。

第十五話 テストなんてこの世から滅んでしまえ

【第十五話 テストなんてこの世から滅んでしまえ】

体育祭を終えて一ヶ月後に控えるテストと言う物があるのだが、俺はそんなもの知らないの。『何ソレ、美味しいの?』と何処かの現実逃避をする人のようなことを抜かしていた。

このテストは勉強できる・できないをセパレートする、同和問題も真つ青な学力的差別を行う、この世から排除されるべきテストなのだ。

別名、学力テスト。あからさまに学力が云々とかになるじゃないの。

え、何でそんな話をしているかって?

俺はその目の前の真実を受け止めるべく、璃桜と放課後の教室にいるからだよ!

「はい、じゃあ光輔君、テスト見せて」

スピード違反を行ってしまった時の警察の検問よりも酷い璃桜のテスト検問。因みに学力テストは欠点こそは無いけれど大学入試の参考にさせられるらしい。

この検問で出すべきテストは運動会後にあつた、中間テストである。

そうだ、今のうちに補足しておこう。

俺の学校では理科と社会は選択制で、文系・理系どちらを選んで
も良いように一年の時、社会は倫理・政経・日本史・地理・世界史
のどれかを選ぶのだ。

そして理科は化学・生物・地学のどれかから選択。ただ、物理は
理系に行ったとき二年で完全にやらされるらしいぞ。

俺はもう文系に行く決めてるので、社会は日本史、理科は何
を血迷ったか化学を選択。

しかしまあ俺の前にいる璃桜はアニメに出てくるキャラのように
顔を引きつけて俺のテストを見ているのだが。

「……光輔君、国語も数学も何でこんなに悪いの？」

「ん？ あー、苦手」

「いや、勉強はしたのかな？」

「全然ですが」

このことから察せるとは思うが俺は面倒臭いことはやらないと言
う、良く言えば自由奔放だが悪く言えばダメ野郎と言っべき性格で
ある。

全部勉強しないという訳ではなく例外的な教科もあるんだけどね。

「あれ？ 英語良いじゃん」

「英語は好きだったからなあ」

「これだったら学力テストでもどうにかなるかもね」

これは喜ぶべきか悲しむべきか分からない何とも中立なセリフだな。俺は学力テストでどうにかなるくらいの成績なのか、それとも英語が良いと喜ぶべきなのか。

この判断は人それぞれだろうけど、俺はもうシヨックとしておこるか。俺の全盛期とも言うべき中学校の時は英語だけでは学年内で一、二を争う学力だったんだけどなあ。

中学校の時は凄かった人でも高校に行くと中学校の勉強なんて雀の涙みたいだとシャウトする人がいるんだけど、その典型的な例は俺だ。

「あとは……社会も理科も平均より上ね、これは勉強したら良くなるかな？」

「璃桜のテストはどうなんだよ、見せてくれよ」

「ええ、良いわよ」

璃桜は中間テストが一番。定期テストはクラスで順位が決まるのだが、この人は二番の人と大差を付けて一番という天才の典型的な例を見せてつけて一番だったらしい。

俺の頭と璃桜の頭を入れ替えてみたいのだが、それを実現する機械と技術がこの世には無いので俺は仕方なく断念することとなった。

「はい、テスト」

「おう」

俺のテストと璃桜のテストが帰ってきた。さて、璃桜のテストを……って、マジかよ!? な、何だって、数学点数三桁だど!?
そしてその他のテストも凄すぎて気持ち悪いほどの点数を獲得しており、才能が必要になる難しい現代文でさえ90点を超えているのである。

ただ者じゃねえぜ、この女。努力者で天才なのか、ナチュラルで天才なのか?

「どうしたの、お前、ガリ勉?」

「いや、勉強は結構やってる日でも一日二時間くらい……だけど?」

「ぎゃあああああっ!」

何だこの女本当に俺らの思い描くような典型的な天才だああああっ!
っ!

こんな女が日本にいると思うと今後の日本の就職氷河期には明るい日差しが見えてくるぞ。五年後は全世界が璃桜に注目している筈だ。

唯一俺が勝負できそうな英語ですら圧倒的に俺に勝ってやがる。

「大学、何処行くんだよ?」

「えーと、一流大学の……医学部かな? それか留学とか、ね」

「ごめん、聞いた俺が間違っていた」

用は神様だつてことか。医学部とか本当にどこの神様だよ。最高峰の大学の医学部から推薦状が来ても可笑しくないレベルだぞ。

さらに留学するとか何になるつもりだ。外国人にでもなるうと言

うのか、恐ろしいな。

「取り敢えず、英語が良いって事は暗記は得意って訳ね」

「勉強に力を注ぐ科目は古典と数学ですか」

「そうね」

それから一週間、俺は璃桜先生というチート先生と共に勉強することとなった。

時計を見てみると戌の時を回っていた、と言うこともザラではあったのだが、そこらへんはもう思い出すのもおぞましいので多くは語らないこととしよう。

「助動詞のべしはね、『すいかとめて』って覚えるらしいのよ?」

「推量、意志、可能、当然、命令、適当……あー、もうイヤだあ」

このような日々が何日続いたかどうかわからないのだが、俺にとっては血の池地獄に浮いてるくらいキツかった試練だと思った。

古典と数学はとにかくやらされて、『あなたの後ろに古典と数学がいるかもしれません……』とどこかのB級ホラー番組のシメのような言葉が聞こえてきた。

ギャルゲーではよくありがちな展開だが、俺はこの展開はイヤだと心底拒否していた。

*

さて、テスト当日。

俺のナッツのようにスカスカだった頭は砲丸の中身のように色んな物で詰まっている。二次関数の平方完成とか、古典助動詞とか、英語の強調構文など。

頭の中の記憶をした知識などは風船の如く破裂しても可笑しくない状態となっているのだ。

「あゝ、一時間目は……国語かあ」

才能が全ての現代文はパスしても良いから古典は点数取ってこいと言われたので、俺は古典だけで勝負することとした。

古典と漢文は英語に似通っているから英語ができれば双方ともどうにかなると言つトンデモ通説は本当だった。科学的にも俺が証明済みだ。

「で、二時間目は数学、三時間目は英語、か」

英語は別に良いとしても、数学が問題らしい。途中過程が合っていればちよつとは点数をくれるらしいので安心はしておいたほうがいいらしいが。

ただ璃桜はどうせ満点とか取るんだろうな、俺の彼女ながらえげつない人だぜ。

「ま、やってやりますかな、テスト」

俺だって勉強すればできることを証明してやるぜ、と決意した。

*

一週間後、このテストは解答用紙と一緒に順位が帰ってくるのだが、それが今日返されるとは。

まあ自己採点してみても、有る程度は出来ていたからそんなに悪くは無いだろう。

「さて、光輔君、結果は？」

「待て、お前は？」

「総合順位が一番だよ」

……この女はつくづくどうしたことだろうか。一度捕まえて頭の中を研究してみたいものだ。天才とはどのような脳をしているのか分かるだろう。

何か普通の人とは違った脳味噌を持っていそうなのだが。

さらに他の教科も二桁は無く、最低順位も3番と言う次元を超えた結果を残していた。

俺の結果に関しては、280人で順位が出るんだけど結構良かったと言えば良かったのかな？

古典42番、数学 73番、数学 58番、数学総合が65番、英語22番。ハッ、俺だつてやれば出来るんだからな。

しかし問題は現代文と国語総合。

「はい？ ……現代文がビリから二番目？」

「そうだよ、国語総合が200番だった」

「あ、そうなんだあ……」

茫然とした顔でこちらを見ている璃桜だが、総合はそれでも72番だったので許してはくれた。しかしまあ現代文の偏差値も酷かった酷かった。

ただ、現代文はもうどうにもならないんだろうと呆れられましたよ、何か？

そして六月末の生徒会選挙に向けた動きが始まるのであった。

第十六話 選挙は民主主義には必須

【第十六話 選挙は民主主義には大切】

地獄のテスト終了後、一学期ももう僅かとなるので行われる選挙がある。それが生徒会役員改選選挙。別名を改選挙と言い、別段階も出来ていない別名である。

一年と二年のクラスから各一名、生徒会立候補者と推薦者を出すのがこの選挙。しかし前者も後者もなったら強制的に生徒会の自由役員をやらされるのだ。

これを知らずに推薦者となった人はムンクの叫びばりの顔になることもあるらしい。

ま、俺はそれになっちゃった訳ではあるけど。

ここからはテスト終了後の話をしようと思うので聞いてくれると嬉しい。

*

「じゃあ生徒会役員の立候補者、誰かいらないか？ それか生徒会自

由役員でも良い」

あれはロングホームルームのことだった。俺は自由気ままな高校生活を送りたいからそんなもんどっちでも良いよ、と流していた。しかし、次の瞬間の挙手により俺はどん底へのバンジージャンプを行わざるを得なくなったのである。

「はい、私がやります」

手を挙げていた女は璃桜ではない。委員長は立候補できないと言うのを知っていたのだが、俺の身近で知っている女子だった。

その女子は実行委員の女子で、俺と一緒に実行委員になってから何度かは話したことがある女子だったのだが、この時から既に嫌な予感はしていた。

「よし、じゃあ立候補者は決定だな、滝下で良いか？」

「はい」

そいつの名前は滝下飛鳥。そいつの見た目、性格を共に一言で表現してやると、『ツンデレ』。もうツインテールにしても声にしてもツンデレ。

聞くと『くぎゅっくゅっ！』と叫びたくなるような声優の声も真っ青のツンデレボイスなのだ。璃桜に次いで学年の男子を虜にする女子である。

クラスの方ではやる気なさそうな生返事で立候補者決定。

何故その女が生徒会へ立候補したんだろうか。
俺はそれが不思議でたまらんぜ。宇宙の外には何があるんだろう
と言っ疑問よりも不思議だ。

「推薦者はお前が指名しても良い、取り敢えず選べ」
「はい、分かりました」

担任の瀬木先生は余計な提案をしたせいでもあるのだが、次の瞬間で俺は地獄への道を一直線することとなったのである。

「じゃあ、実行委員でも一緒の水村君、お願いします」
「はい!？」

俺みたいな木偶の坊を呼ばなくても良かったのに俺を指名した滝下。まだ仲の良い女子とかいるだろうし、最悪の場合先生に指名させれば良かっただろう。

何故に俺を指名した？

「うん、じゃあ決まりだな」
「先生！ 異論があります！ 何で俺なんですか!」
「決まってるじゃないか、滝下がお前を指名したからだよ」

決まってるじゃないか、登山者はそこに山があるから登山をする

んだよ、と言う名台詞のように理由を話さないでください！？
登山者と推薦者の決定を一緒に流して欲しくないのだが。

「うん、じゃあ仕方ない、多数決だ」

「少数意見の尊重しないんですか！？」

「クラスの皆の意見を聞こうか、水村で良いと思う人、手を挙げて」

は、いい、と言う男子のやる気なげな声が響き渡り一斉に手が挙
がった。その数、俺をのけて数えてみると全員。具体的な人数を言
うと39人だった。

これじゃあ少数派意見も何も無いよな。

「じゃあお願いな」

「……はい」

これがロングホームルームでの断末である。俺が地獄へとダイブ
を決めた瞬間でした。

*

何とも面倒なことに立候補者と推薦者はポスターを作り各クラス
で選挙活動を行い、生徒会室へ打ち合わせなどに行かなくてはなら

ないのである。

俺はコンビニにジュースを買わされに行くのとこの仕事では完全に前者の仕事の方が楽だなと嫌々ながら行うこととなった。

勿論遊ぶ暇なんて無く、友達と帰りに道草食う為のゲーセンなんて行けなくなった。中世の王宮からの禁止令よりもツライ弾圧だ。

猫の手とかじゃなくても良いから微生物の手でも借りたいモノだ。

「ちょっと、何してんの？ さつさとやりなさいよ」

「はい、分かってますよ」

後ろからツンデレボイス。俺に課せられた労働はポスターの色塗り。美的センスは皆無なのに俺はアクリル絵の具を手に行っている。

ちなみに二枚描かなくてはならないので俺の横ではもう一枚のポスターの下絵を滝下が描いている。完全に漫画の書き方を参考にした感じだ。

コイツの描く絵はマジモノで深夜アニメにも負けられないような絵なのである。

「滝下、お前さ、絵上手だよね、何処で練習したの？」

「アンタには関係ないでしょ！？」

「……はい、申し訳ないです」

「全く、分かれば良いんだからっ」

会話もこんな感じなのか。ツンデレって恐ろしいね。もし世界中の人がツンデレに目覚めるようなことがあればコミュニケーション

が途切れちゃうね。

俺は仕方なくせつせと色塗りに励むこととなったのだ。

「はい、二枚目も終わったわよ、色塗りお願いね」

「はいはい、分かっています」

「それなら宜しい」

ガタンと席を立つた滝下。お前も下絵終わったのなら色塗りくらいやってくれよ、と言いたいのだが俺にそんな権利は無く蝉の一生くらい儂いので何とも言わないこととする。

不器用に名前の所とクラスの所を塗っていた俺は滝下が何処かに行っていることに気が付いた。しかし荷物はあるので帰った訳で無いことが分かった。

どうせトイレだろう、とスルーしていたが、

「はい、今日のバイト代」

「ん？ あ、ありがとう」

「べ……別にあんたのためじゃないんだからねっ！」

頬を赤くする滝下。俺の二次元に一応興味があるから分かるんだけど、この女は典型的なツンデレだ。どこかのB級深夜アニメに出て来そうだな。

色塗りを終わらせた俺はバイト代として俺の机の上に置かれた炭酸飲料を啜りながら椅子に深くもたれかかり、時計に目をやった。

うわー、五時半かあ、家帰ってパソコンする時間が無くなった。

「うん、じゃあこれ出来たから渡しておくよ」

「分かったわよ」

「じゃあ俺家に帰るよ」

「明日も、良かったらお願いね」

「どうした？」

「いや、何でもないわよ」

いつも怒っているかのようなツンデレボイスを俺は聞きながら荷物をもとめて教室を後にした。

何で俺を推薦者に選んだんだろうか。正直な話、それだけが分からない。理系に行けば習う数三・数Cくらい分からないと言っても良いはず。

紙パックのいちごオレを教室で一人啜っている滝下の頬杖をついた後ろ姿は何故だろうか、かなしそうに見えた。

第十七話 屋台のラーメンは一般的に言って美味しい

【第十七話 屋台のラーメンは一般的に言って美味しい】

はつきり言おうか、俺は学校へ行きたい訳がないのである。

「おい、光輔最近お前顔色悪いぞ？」

「悪いな、気にしてくれてるのか？」

「友達がそんなのだとそりゃあ俺も心配するぞ」

俺に話しかけたのは体育祭でダメ野郎と俊足の二足の草鞋を履いた男、潤平である。体育祭以来連むことが多くなった。

冒頭でいきなり引きこもり宣言してはしまったが俺は学校に来てるぞ。

ツンデレに何処かの労働者ばりにコキを使われるから嫌なだけであつて、学校が地獄になつたとかそんな訳ではない。

最近は英語の授業で「His boss made him work against his will.」と言う文章を見て笑いが止まらなかつたことがあつたぜ。

「お前そう言えば、滝下と早乙女で二股してんのか？」

俺は先程買ってきて飲んでるジュースをスプリングラーのごとく噴水するところだった。こんなことになるのは無理も無いだろう。いきなり恋愛関係の話とか止めてくれ。地球温暖化で日本が沈んでしまっくらい嫌だよ。

「それは無い、俺はアイツのことは嫌いだ」
「そうか、お前にも遂にモテ期が来たのかと思ってしまったぞ」

オイ、ちょっと待てや。俺にだっていつの日かモテ期は来るぞ。人間どんな人でも三回はあるらしいけどな。

「ちょっと良いかしら、光輔君」
「どうしたんだよ滝下」

噂をすれば何とやらだな。どうせこの女から与えられるモノなんてバイト代と労働だけだろう。いい加減ストライキでも起こしてみたいよ。

この女から逃げようとするなんての×太くとジャ×アンが勝負することに等しい。用はね、見込みなんて無いんだって事だ。

しかも逃げれば大監獄での拷問も真つ青な鉄拳制裁が待っている。

どうせ俺はストライキなんて起こせる訳も無く、階級に縛られた平民のように無力に命令を聞かされる儂い奴なのさ。

「今日はメモあるから、放送原稿でも考えて」

「自分で考えるよ？」

「考えてみなさいよ、あんただったら私からでは見えない視点で考えられるでしょ？」

成る程、確かに言われてみればそうだけど。ぶっちゃけ言ってみれば自分が考えるのは嫌だからと言う変な言い訳でしょ？
どうせ反抗するなんて無理だから俺がやりますよ。

「分かったよ、授業中に内職でもして考えておく」

「じゃあお願いね」

そうそう、内職って分かるかな？ 授業中に塾とかで覚えてこいって言われた教科書とか見る奴いるけど、そう言う裏で他の勉強することね。

先生までもこの言葉知っているんだから驚きだった。

*

学校終了後。俺は生徒会室へと立会演説の時に喋る内容を書いた放送原稿を提出してきて、教室に戻りながら帰ろうかと思っていた所。

俺の家は親が共働きなんだけど今日は母さんが残業で帰るのが若干遅くなるから、メシは悠里と何処かで食べてこいとお金と書き置きがあった。

悠里は今朝ラーメンが食べたいと言ってたっけ。

「さてと、悠里にメールを送っておこうか」

どうせアイツは今日も部活だろう。最近はずつとピッチャーをやっている。全てのポジションは経験したと言った気がするな。

あれこれしているうちに六時なのでもう部活も片づけをしている頃か。

と、思いながら教室を覗いてみると。

「……あれ、滝下、まだいたのか？」

「そんなの私の勝手じゃないのよ」

「そうだな、悪い」

俺の机を見ると今日のバイト代はパンだった。わざわざコンビニで買ってくれたのかどうか知らないがコンビニで売っているようなパンだった。

そして当の滝下は何をしているかと見ると数学の参考書を開いている。

「なあ滝下」

「どうしたのよ？」

「メシ、妹と食べに行くんだけど一緒に行かないか？」

何故だろうか、俺はあのツンデレは嫌いだったのに。悠里に一番紹介しづらい女だと俺は格付けしていたのに。

メシと一緒に食いにいこうと誘ってしまった。

「じゃあ私が満足できるような物じゃないとダメよっ」

日曜の朝になると放映されているプリティでキュアキュアなあのアニメでも聞くことの出来ないようなツンデレボイスが嬉しそうに聞こえた。

*

「……兄さん、その人、誰？」

「生徒会選挙と一緒に仕事している人、滝下さん」

「宜しくね」

おお、猫カブってやがる。流石は生徒会立候補者だ。ツンデレボイスでこれほど性格が良さそうに見えるとか凄く大きなギャップだな。

そう言う訳で俺と悠里とツンデレは駅前の屋台のラーメン屋まで

来ている。

メールで連絡してから、先程落ち合った訳だぜ。

「ちょっと生徒会選挙の話するから、悠里、ちょっと何か飲んでろ」

「何か頼んで良いの？」

「良いよ、その間俺と滝下の話は聞くなよ」

しびしびと了解した悠里は携帯をイジリだしたので俺は心おきなくツンデレと話が出る。取り敢えず色々と聞こうか。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「何よ」

「お前って、学年成績二番だよな？ 反抗するな、まともに答えろ」

「よ」

こんなことを聞いたのは俺がバカだからでは無い。思惑くらいあるぞ。

俺らの会話を聞けば直ぐに分かるはずだ。それでも分からないのならば、それは現代文が全然出来ない奴か外国人かだろうな。

「ええ、その通り」

「お前は才能ではなく努力で成り上がった……違うか？」

「違う訳は無い」

今日教室で勉強している理由と合致した。そうならば努力だけで何故学年成績二番なんて言う人間辞めましたと言うような成績を取ろうとするのが分からん。

深い理由か何かがあるのかは分からないのだが、取り敢えずそれも聞くことを視野に入れた。俺も分からないけどもメシに誘った理由はコレだったのか。

「俺だつたらまず努力だけでそんな成績は取らないけどな、何故だ？」

「……それは」

躊躇い半分のツンデレは、信じられない事実を告げようとした。

第十八話 選挙は小さな戦いである

【第十八話 選挙は小さい戦いである】

「理由を聞かせて貰おうか」

「ええ、私は」

横でオレンジジュースにがつついている悠里を尻目に俺はツンデレの滝下と、先進国の首脳会議かと言っくらしいの雰囲気話をしていた。

二番という人外成績を取るくらいなら何かあるんだろうね。理由も無く取る奴がいたら俺はソイツの頭と俺の頭を変えるように脅しているはずだ。

「私の家は、父親も母親も有名な人なの」

「……はい？」

それがどうしたんですか？ 何か俺が聞いたことに接点はあるのでしょうか？ それだけが私の聞いたことか理由なのでしょうか？ いやちよつと待つんだ、と言っか親が有名な人だったら何か困ることでもあるんですか？

脳味噌が洗濯機で洗われているくらい、ぐるぐる回って混乱してるんだが。

「お父さんはとある会社の社長で、お母さんは都立病院の医者」
「…………え？」

用は滝下って家がボンボンってことか？ 社長とか医者とか優秀で金持ちの人がなるような職業でありながら金持ちの代名詞だよな？
と言うことはまあ大体予想もつくよ。このことを聞いても分からない奴には『常識外れ』の一言を授けようではないか。
母親が医者って事は滝下が頭良いのも分かるけどな。

おそらく滝下は努力の部類だ、才能も入っているだろうけど授業を一番まともに受けているのは滝下と言うことを考えれば努力で賢いだろう。

俺なんて時々寝てるし。

「家には執事が五人いる」
「ああ、マジですかあ……………」

俺の周りが一瞬だけ南極ばりの寒さになるのを感じた。ヤバイぞ、本当に金持ちだ。執事がいる家庭とか聞いたこと無かったんだけど。マイケル・ジャクソンの家のように敷地の中に遊園地があるとか言うのならば、俺はあまりにもショックすぎて亡命するぞ。

一度くらい遊びに行ってみたい物だな。

俺はきつと滝下の家を見た瞬間にハレンの作者は女の人だったと聞いた時くらいの驚きで吐血でもするんじゃないのかな。

「両親がそんなのだと、私が賢くないとどう思う？」

「まあ……評判は下がるだろうな」

「そう言う訳」

成る程ね。道理で二番なんて言う人外成績を取っていた訳か。

「でも、早乙女さんは抜けなかった」

「璃桜だろ？ あれはナチュラルだから仕方ない」

「あの人と私の点数は、5点差だったの」

オイオイ、タチの悪いジョークだろ？ 努力は才能を凌駕するって言うけど正しくそれが起きようとしているじゃないか。

窮鼠猫を囓むって言うけど、本当にネズミが猫に勝つという下剋上が起きたのか。失礼な例えかもしれないがな。

しかし此処まで勉強していると相当努力している訳か。

どれくらい勉強しているんだろう、人生中の時間をどれだけ勉強で無駄にしているんだ？

「何時間勉強してるんだよ？」

「平日は部活だから、平日は3時間で休日に10時間くらいかな」

「……うっ、気分悪い」

想像するだけで吐き気がしてくるぞ。平日に10時間勉強するか何処かに電池でも入っているんじゃないのかな。俺なんて部活やってなくて平日は基本的にしなくて休日にもあやっつて3時間くらいだぞ。

「私は推薦で大学へ行くの」

「何処の大学が良いんだよ？」

「決めてないけど、医学部か経営学部」

両親のどちらかの仕事は継ぐとは考えているみたいだな。

しかしまあ二番とか取ってしまったのなら俺は理系に行くことを薦めよう。文系に行くと三年で優秀者が集まるクラスに入れなくなるかもしれないかな。

医学部に入って母親のようになれば良いんじゃないかな。

「私は親が優秀で私がどうだからって評判は下げられたくない」

「そうなのか」

「だから、今こうやって勉強しているんでしょうね」

「改選拳だけと終わるまでは付き合っただけだから、当選しろよ」

「分かってるわよ」

そうとだけ滝下に言い残して、俺は割り箸に手をかけた。

「滝下さんは実行委員で同じ仕事をしていた仲で、何事に関しても……」

俺は今改選拳の演説と言うことで滝下の推薦演説を行っている。しかしまあ男子が女子を推薦しているのは俺だけで、全校生の数十人はこっち見て笑っている。

笑っている人らに告ごう、俺は滝下のことを狙っている訳では無い。コイツに推薦人として名前を挙げられただけだぞ。

それと、鞭打ちの刑も真っ青な労働を受けていたんだがな。

「紹介にあずかりました、滝下です」

滝下はいつものツンデレボイスで演説を行っているのだが、何処か凜とした感じがしている。これも推薦を取る為と思うと歯痒いのだが。

ただ本人の気持ちは本物なので俺は別に良いと思う。今も真剣そうに演説しているし。

この真剣さの裏には推薦に受かりたいと言う陰謀があると知れば告白ドッキリにかけられたよりも希望をそがれた気分になるだろう。

別に当選してしまえばソイツが生徒会役員なんだから良いんじゃないかねえの？

この国はアメリカでは無いことは分かっているけど、生徒会に当選したとしても仕事をして結果が出れば別に俺は良いと思うぞ。

「ありがとうございます、この私に一票をお願いします」

演説終了。前で立っているから時間が短く感じた。聞いている相手は長く感じて俺らは短く感じるこの感覚は簡易相対性理論と言うべきだな。

演説も終わったのに未だに緊張しているのか、俺はバッテリーが切れかけのロボットのような動きで席へ。

「お疲れ様、良い演説だったぜ」

「当選していたら良いけどね」

「まあ結果は結果だろ、信じればどうにかってるぞ」

*

休み明けのことである。久しぶりに楽しい楽しい学校が待っているぜ、もう地獄の改選拳なんて無いんだからな。
後は結果速報を見るだけなのである。

「ん？ 誰からだろう、メールか」

初めて見たアドレスだった。誰か間違えて送ってきたんだろうか。俺はウイルスメールが入っているかどうかを魚から骨を取り除くように注意しながら開いて見た。

「これって滝下か!？」

件名には『ありがとう』と書かれていて、本文に挿入されている写真を見れば、当選者一覧の名前に『滝下飛鳥』と書かれていて、滝下も写っている写真。

そして、その写真の下には『これからも宜しく。』とだけ書かれていた。

「うん……まあ、良いんじゃないの?」

自分に言い聞かせるように呟き、俺はこれからの学校生活を考えた。次は球技大会だろうけど、何があるかは分かるはずも無い。

一つ分かることとして分かることを挙げるならば、これからは俺は両手に高嶺の花を持った学校生活が始まることだな。

第十九話 球技大会でラフプレーする奴なんてスポーツマンとして最低

【第十九話 球技大会でラフプレーする奴なんてスポーツマンとして最低】

さて、来てしまったよ。我らの一学期最後の娯楽イベント。その名前を翔鳳杯と言い、一般的に言う球技大会と言う奴なのである。何とこのイベント、色々なクラスの応援も来るのだから彼女の欲しい男子は皆、空を自由に羽ばたく鳥のように舞い上がってしまうという訳だ。

俺はそんなのは別にいらんと思うが。

「えーと、では翔鳳杯についての競技の説明を」

実行委員の俺は、生徒会へ入ってナイフのように角張っていたツンデレもバスケットボールのように丸くなってしまった滝下と一緒に説明するのである。

男子と女子で種目は別れていて、男女共にあるのはバスケ、バレー、テニス、卓球。男子だけにあるのはソフトボールで女子にあるのはドッジボール。

ただし人数の関係上、一つの種目は捨てなくてはならない。

因みにこの翔鳳杯は三月にある最終決戦に繋がっていて、此処の結果と三月の結果を合わせてベストクラスを決める、半年かけての

イベントなのだ。

「では、競技の方を決めたいと思います」

「各競技の経験者は優先してその競技に入ってください」

「ただし、ある競技の部活に入っている人はその競技には出られませんが」

俺が出る競技はバスケットボールだ。うん、誰か似合わんと言ったかどうか知らんが俺は中学校の時バスケット部に所属していたんだぞ。チーズの原料は牛乳だと聞いた時のような驚きだとは思うが、俺だって何かしらスポーツはやりたかったんだから。

「水村、あんた何やるのよ？」

「俺はバスケットだ」

「へえ、早乙女さんとは違うのね？」

「中学の時はバスケットだったからな」

璃桜は中学時バレー部だったらしいのでバレーに出るとは言っていたけど俺はバスケット部だったのでバレーでは出ない。

うん、バスケット好きだな。

でも何で俺はバスケット部に入っていないかと言われると俺も返答には困る。

そうだな、俺が入っている部活を覚えておくか。軽音楽部だ。

ただし人数は足りていない為に休部中で、部員は俺とあと一年の女子だけ。

「お前は何に出るんだ？」

「テニスで良いかなと思ってる」

「確かお前剣道部だっけ、テニスは結構体力居るぜ？」

「瞬発力はきつと良いはずだからね、それくらいは使えるでしょ？」

成る程、そう言う発想もあるのか。

それは良いではないか、俺はそう言う発想は無く競技はバスケットに出ることだけしか考えていなかったんだが。

取り敢えずバスケットに出るのでそれ以外は考えないこととしようか。

「一通り、書いたようですね」

「じゃあこれで確定します、良いですか？」

周りからは「いい」と言う骨を抜かれてしまい動けなくなった人のような無気力さで確定。コイツら本当に勝てるのか？

高篠さんが男子の方のソフトボールに出れるかと裁判に異議ありと訴える弁護士ばりの形相で抗議していたんだけど、出たい人数が足りなくて無理だったことがあった。

「そうそう、練習は各自でするようにね」

「ホームルームにやるとかそう言うのはナシです」

と言う訳でブライニングが飛ぶのだが、自発的に練習をやりたい人

はあまりいないだろう。
どうせ俺くらいじゃねえのか？

「さて、昼休み練習してくるかな」

「誰もいなかったら哀しいよね」

「そんなこと言うなよ、誰かは来るかもしれないぞ？」

*

……今俺は第二体育館にいたのだが、誰一人として来ている人はいない。

俺ってやっぱりはりきりすぎているのかなあ。

「まあいいや、バスケットボール取ってこようっと」

そう言えば高校生は七号球なんだっけ？ 掴めていた物が掴めなくなると思う大きな変更があることに俺はショックを受けた。

今まで当たり前だと思っていた物が当たり前じゃなくなる……そんなこと、俺に受け入れられる筈があるのだろうか？

はい、下らない話は終わりにしようか。

「うん、久しぶりだ、この感触」

ボールの感触といい、ドリブルした時の音といい、それらは俺が試合に出るたび感じていた試合での興奮を思い出させてくれた。

脳裏にバツシユのスキル音が思い浮かぶ。懐かしいの一言に尽きる。

そして、俺はあのフォームでシュート。ボールは弧を宙に描いてリングへと入った。ボールがネットをくぐる音も聞けば気分がスカッとする。

「レギュラーで出ていた訳では無かったけど、やっぱり思い出すな」

俺のチームは身長が低くて俺が三番目に背が高かったんだっけ？
それで二人はレギュラーで出ていたからソイツらの代わりで俺が出ていたんだよなあ。

「スリーポイントが入るとテンションあがるんだよなあ」

そう言いながら入らないだろうな、と思ってスリーポイントを一本。意外にも綺麗な弧を描き、リングの中へと吸い込まれるように入っていった。

うっはー、テンション上がる上がる。この時に観客席から歓声が上がるんだけど、それが俺らをハイテンションにさせるんだよな。

俺も一度だけ決めたことあったんだけど何かが覚醒するんだよね。

「楽しみだわ、翔鳳杯」

その後、俺は四時間目の授業に遅れたのは言うまでも無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9050s/>

俺の彼女は委員長です。

2011年11月27日01時45分発行